

東京成徳大学  
私のミニ・アクティブラーニング実践記

企画・IR室

平成28年3月16日

## 目 次

はじめに	3
共通領域部	4
人文学部	
日本伝統文化学科	5～7
国際言語文化学科	8～19
観光文化学科	20～21
応用心理学部	22
福祉心理学科	23～32
臨床心理学科（一部大学院を含む）	33～43
健康・スポーツ心理学科	44～53
子ども学部	
子ども学科	54～68
経営学部	
経営学科	69～73

はじめに

今、日本の教育界は小学校から大学までアクティブラーニングのブームである。日本の教育を変える動きとなるのか、またしても、ゆとり教育ブーム（政策？）の二の舞になるのか。結果が見えてくるのには10年にかかる。その間、なにもせずに傍観というわけにはいかない。試行錯誤しながら、時には全力で、時には斜め、後ろに見ながら、日々の授業改善をしていくことになる。

企画・IR室では、アクティブラーニングの要素技術は、これまでもそれなりに授業に導入されているはずとの思いから、その実態調査をおこなってみた。

一つはアンケート調査である。こちらも別途、報告書を作成中である。

そしてもう一つが、それぞれの先生がこれまでに実践してきているアクティブラーニングの実践記録を収集してみることであった。それをまとめたものが本報告書である。

本報告書から、それぞれの先生方が、みずからの授業改善に役立つ工夫や技術を一つでも2つでも学び取って活用していただけることを期待したい。

平成28年3月16日

学長 海保博之

## 情報リテラシー教育における Moodle の利用

情報入門（1年生対象，1クラス30名程度）

### 1) 授業のねらい

パソコンを用いた調査・収集の仕方、レポートの書き方、発表の仕方、提出の仕方などについて知識を得る。実習を通して、Word、Excel、PowerPoint 等アプリケーションソフトの基本的利用方法を習得する。

### 2) 授業方法の概要

特定の教科書は使用せず、毎回の授業内容（講義資料）を PDF ファイルで Moodle（学習管理システム）に公開している。受講生は授業開始時に PDF ファイルをダウンロードして自分の PC 画面上に講義資料を表示する。90 分の授業のうち前半の約 60 分は教員が説明をしながら学生は同じ作業をすることで Word、Excel、PowerPoint などのソフトウェアの使用方法を学ぶ。後半の約 30 分は課題を与え、自力で解かせることでその日の授業で学んだこと（知識・技術）を確認させている。授業終了時に Moodle の課題提出機能を使って課題（ファイル）を提出させている。

### 3) 工夫している点、心がけていること

昨年度までは 90 分の授業時間のほぼ全てにおいて教員の説明通りに作業をさせており、途中でつまづいた学生や質問のある学生がいた場合にはその都度その学生に対して個人指導・対応を行ってきた。数年前まではこのような授業の進め方で受講生の大半は知識・技術を習得できていた（ようである）。しかし、近年は教員の説明に従って授業中に作成した課題は完璧にできているものの、次週以降にはほぼ同一内容の課題を与えると自力でできない学生が目立ってきた。

そのため、今年度からは毎回の授業において後半 30 分程度を使い、知識・技術を定着させるための課題を与えている。できる学生にとっては数分でできてしまうような課題であっても、不得手な学生にとっては 30 分かかることも少なくないようである。また、前半 60 分の説明で十分に理解できなかった学生も講義資料を再確認することで授業時間内に習得しようと努めている学生も見受けられる。そのような学生のために詳細な内容の講義資料を作るように心掛けている。Moodle に講義資料を公開しているため、スマートフォンなどでの閲覧も可能となっている。

学科全体で取り組むA L 「古田織部没後 400 年記念行事」

○行事の概要 本学科の開設以来「伝統文化茶道」の講師を「式正織部流」にお願いしている。本年が古田織部の没後 400 年にあたるため、学科で記念行事を行い、学生に広く安土桃山時代と古田織部について学ばせたいと考え年間行事として企画した。

○行事一覧と対象学生方法

①6月12日 「伝統文化(茶道)」(担当伊藤一美講師)の授業において式正織部流門下による台子付き手前拝見(解説付き)

- ・参加学生 伝統文化茶道 22 名 日本文学史概論 25 名
- ・授業の内容 茶道の授業において式正織部流の門下により、授業では行えない大名の茶席の手前を解説付きで見学した。日本文学史概論の受講生については事前に文学史と絡めて安土桃山時代と茶道の流行について講義を行い、事後レポートを提出させた。

②7月3日 虎屋文化事業部の講師による「安土桃山時代の菓子」講演会(公開)

- ・参加学生日本文学史概論 25 名 一般市民数名
- ・日本文学史概論の授業の中で公開講演会を行った。学生には事前の指導を行い講演内容についてレポートを提出させた。

③10月31日 演習「芸能史」「文化史」「古典文学」の合同発表会(翠樟祭参加)

- ・参加学生 学科全員 一般市民数名
- ・参加した各演習の授業では前期に「古田織部と安土桃山文化」というテーマを決めて調査発表を行ってきた。それをまとめた形で、翠樟祭において学科全員の前で発表した。当日の発表題目は以下の通り。

演習「文化史」:「織部茶会記より」 演習「古典文学」:「洛中洛外図と茶」

演習「芸能史」:「狂言と茶」

④12月4日「茶道」の授業で安土桃山時代装束による式正織部流手前と衣装解説。

- ・参加学生伝統文化茶道 22 名 日本文学概論 36 名 学芸員養成課程学生 5 名
- ・当日は学芸員養成課程の4年生の協力で、茶道の受講生 5 名が古田織部の正装姿、当時の茶会の服装と考えられる直垂等を着装し、青柳教授の装束についての解説を聞いたうえで、直垂姿で手前を行う。日本文学概論の受講生には事前指導を行ったうえで見学し、レポートを提出させた。

○A Lとしての成果

①、②については学外の協力を得た授業となった。③は参加可能な演習で半期同じテーマで学んだが、合同発表により学生相互の理解が進んだ。④については1年生の理解が進んだ。学科全員が同じテーマで年間行事を体験することにより、互いの学びに触れてさらに理解を深めるという点で成果があった。

2015年11月28日、「古典の日記念女流義太夫演奏会」が行われました。これは学科の全学生が参加する行事であり、内容は女流義太夫の演奏家である太夫・竹本土佐恵氏と三味線・鶴澤寛也氏による「寺子屋の段」実演とワークショップです。

出席者が詞章を語ってみる体験（ワークショップ）に十分な時間を取りました。その結果、実演の聴聞の際、深い理解が得られたと、学生たちが語っています。

また、複数の科目の履修生が会の準備に当たりました。「メディア文化論」履修者は庄司先生のご指導の下、チラシを作成し、「房総文化演習」履修者は楽屋働きを経験し、両講義の履修生は受付も行いました。また青柳先生の指揮で、会場の舞台設営を行なった学生もいます。

一つの公演が成立する過程を実際に学んで、協働学習および体験学習、課題解決型学習のよい機会となりました。

翠樟祭発表会「古田織部と安土・桃山時代文化」におけるALの実践

演習（文化史Ⅱ）（受講生 15名）

1) 目標

今年度、日本伝統文化学科では、古田織部没後 400 年を記念して、さまざまな行事を行った。そのうちのひとつ「古田織部と安土・桃山時代文化」では、演習（文化史Ⅱ）の成果を、翠樟祭において「古田織部と茶会記」と題して発表した。資料の読み込みと整理、授業での発表と討議をへて、公衆の前で効果的な発表を行うことを目標とした。

2) 授業方法の概要

- ①原文で書かれた「織部茶会記」を現代語訳する。
- ②茶会に出席した人物、茶室、茶道具、掛け軸、生け花、会席料理などについて調査する。
- ③調査した結果をレジュメにまとめて授業で発表する。
- ④発表についてのディスカッションを行う。
- ⑤発表資料、発表に対する意見をもとにしてパワーポイントを作成する。
- ⑥パワーポイントによる発表を行う。
- ⑦発表についてのディスカッションを行う。
- ⑧最終発表資料を作成する。

3) 成果

- ①原文読解能力の向上。
- ②資料の調査・分析能力の向上。
- ③発表資料作成能力の向上。
- ④討論能力の向上。
- ⑤発表能力の向上。
- ⑥「①」「②」によって思考能力の向上がはかられた。
- ⑦「③」「⑤」については、翠樟祭での発表を目的としたことで、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の向上にもつながった。

英語による自己紹介、プレゼンテーション等

英語発音クリニック（応用）（2年生対象、登録者5名）

1) 授業のねらい

英語発音クリニック（基礎）では、語、句、短文レベルの発音練習・矯正を中心に行ない、（応用）では特に英文パッセージや数行におよぶ長文等について速度・抑揚等を含めて聞き手にとって受容しやすい発音や技術の習得を目指す。並行して英語による自己紹介文などを作成・発表させることを通じて人前で英語を話す羞恥心の克服もねらいとしている。

2) 授業方法の概要

基本教材に沿って、比較的長い英文パッセージについての発音練習を行なう。また数種のひな形に沿って自己紹介の原稿（英語）を各自執筆させ、添削・加筆修正した後、音読させる。繰り返し発音指導ならびに練習を行ない、場数を踏ませて全文を暗記させる。就職面接などの折に請われれば英語で自己紹介ができるようにしておくことを目標としている。

3) 工夫していること、心がけていること

- ・人前で英語を話すことは基本的に慣れていない学生がほとんどであるため、授業は極力楽しく、気楽な雰囲気を出するように努めている。
- ・矯正する際には受講者の発音に対する否定的なコメントが多くなりやすく、意欲を失わせることになる可能性があるため、発音上の留意点を指摘すると共に優れた点を褒めるなど必ず両面から指導するよう心がけている。
- ・作成した自己紹介文等は単位修得後も表現等について常にレベルアップしながら英文を加筆修正し、より良い紹介文に更新・改訂するよう勧めている。
- ・英語による人前での自己紹介の練習をきっかけにして、英語でのコミュニケーション・プレゼンテーションが徐々に上達してほしいと願っている。

作文 TASK 遂行のための AL ※CALL またはネット通信が可能な PC やタブレットを使用

韓国語作文 (受講生数 11 名)

1) 韓国語コーパスによる使用頻度の高い語彙を習得するための作文の授業である。学生個人ではなくグループで TASK を課すことで、TASK 遂行の過程における協調学習や読む・聞くの Input 技能、書く・話すの Output 技能がバランスよく向上することを目指す。

## 2) 授業方法の概要

- 作文のテーマを課し、そのテーマの TASK 遂行に必要な文法や表現のおさらいをする。→ このとき、教員の説明の直後に学生による Output (説明のまとめ) を行うと、記憶の定着に効果がある。
- 教員による作文の例を学生に読ませてから、口頭で Quiz 形式の質問を行い答えさせる。その後、特に注意する発音や Prosody に関する注意点などを与えながらシャドーイングやオーバーラッピングを十分に行い、学生の TASK 遂行時の流暢な発話に備える。
- フリーライダー対策のため 3~4 名程度の少人数のグループを作り、注意点(日本語禁止、全てのメンバーの事柄が含まれること)などのガイダンスを行う。
- グループのメンバー各自に、口頭によるインタビュー形式などで情報を集めて、作文の下準備をさせる。それを基にグループの作文をまとめて発表の準備をさせる(メンバーの人数分だけの Quiz 問題も用意する)。→ 教員は学生の参加度などを確認しながら作文の誤用に対するフィードバックを行う。※発表する作文は PC で入力させる。
- グループの全員が発表の役割を分担して、口頭による発表及び Quiz を行う。他のグループの学生は Quiz に口頭で答えながら、文全体の読解を行う。→ その際に教員は、未習の単語の意味などを板書により提供し、学生による活動の妨げにならないようにする。(学生の発音などが間違っているてもこの段階ではフィードバックを行わないように注意する。)
- 学生の活動が終わってから、発表中の誤用に対するフィードバックを行い、全てのグループの作文のシャドーイングとオーバーラッピングを行う。※CALL などを利用して作文の内容を視覚的に確認できるようにする。
- 授業外の遠隔指導のための課題を課す。まず、e-Learning (Moodle) サイトに全てのグループの作文の和訳をアップし、設定した期限内に韓国語に翻訳して提出する課題を課す。提出期限後に教員によるフィードバックを行い、再度修正版を提出させる。

## 3) その他

- 入学してから学ぶ韓国語入門者の指導においては、1 年次の間(特に前期)は AL を頻繁に行うことは厳しい。英語教育と異なり、文法や語彙の蓄積がないためである。AL の全般的な問題点として挙げられているように、一つの学習テーマを指導するためには授業の中で長い時間を割くことが求められるが、韓国語の授業は週の授業時間が少ないという事情もあるため、限定的に実施している。

学生参加型授業を目指して

地域文化研究（中国）（受講生数 12 名）

私は語学・ゼミ以外に文化教養系の授業を 6 科目担当しており、その内の 5 科目においてテキストを使用せず、自分で授業資料を作成している。その資料は毎回 A4 紙 1 枚程度であるが、要所を空欄にして傍線を引き、多くを学生に答えさせるようにしている。例えば今学期の「地域文化研究（中国）」の資料の一部は、次のようである。

☆日宋貿易

平安中期の\_\_世紀末には宋船が\_\_に来航し、\_\_で貿易をしていた。

\_\_世紀後半に\_\_が大和田泊（現在の\_\_港の前身、平安時代に行基が開いたという）を改修し、\_\_海航路を整備して貿易の振興に努めた。この貿易は\_\_中期まで続いた。

〈日本から中国へ〉…\_\_、\_\_、\_\_、\_\_など

〈中国から日本へ〉…\_\_、\_\_、\_\_、\_\_、特に\_\_（\_\_）が日本国内に流布し、日本の\_\_の進展に寄与した。

この中の\_\_に入る言葉を学生に答えさせる。積極的な学生がいれば、こちらが問いかけるとすぐに答えが返ってくる。しかしおとなしい学生の多い本学では、しばしば誰も声を上げないことがある。そこで順番に、或いは目の合った学生に、指名して答えさせる。「鳴くよウグイスと良い国作ろうの間は？」などとヒントを出すこともよくある。上記下線部の「行基」のように、難しい字や人名を読めた時や答えられた時には+2 ポイント、など平常点として成績に加点することもある。難しいことを調べる為であれば、授業中の携帯電話での検索機能使用を許可している。

また出席カードの裏に、その日の授業で印象に残った点、疑問に思った点など、何でもコメントを書かせるようにしている。「金は輸出するほど昔採れたとは知らなかった」「銅銭をわざわざ輸入していたとは思わなかった」など率直な答えが多い。その中で疑問にはなるべく次の回に答え、聞き違いや理解の齟齬らしきものがあれば、ただすようにしている。また良いコメントがあれば紹介するようにしている。その為か最近はコメントを長く多く書いてくる学生が増えたように感じ、毎回、それらを読むのが楽しみになっている。より建設的な方向へ向かうように生かせないかと、思案中である。

以上

(1) 本科目の狙い・到達目標

新聞の社説、論説記事、特集記事などを読み、その記事の問題の背景を含め知識を深め、それに対する自己の見解を述べることができるようになる。

(2) 授業の内容・実態

主として政治にかかわる事件・問題を中心に毎回記事を取り上げて、そのコピーを学生に配布し、まずは読ませ、内容を把握させる。そして私が簡単に背景等を解説し最低限の知識を伝える。その後、学生に答えさせる形で記事の要約や何が争点・論点なのかについて考察させている。当初の構想では、要約やポイントの指摘などの作業結果を受講者同士でフィードバックさせたのち、全体で発表や討論を行うことも考えていたが、なかなかそこまでの作業には至っていない。現状は、記事の内容の理解、背景的な知識の伝達にかなりの時間を取られてしまっている。そこで、課題として、自ら選んだ新聞記事について、①要約する、②その記事のポイントを指摘する、③自己の見解を述べる、という作業を行わせ、A4用紙1枚にまとめて提出させた。これを人数分コピーし全員に配布させ、ひと通り読ませた後、各自に自分の提出したものについて口頭報告を行なわせた。今はこの課題の2巡目を実施しているところである。1回目は学生の報告に対し私が質問や内容の修正指導をすることで終わったが、2巡目の現在、報告者が次の報告者のプレゼンに対して、質問等何らかのコメントを出すことを求めているが、これによって1回目の時よりも他者の発表を注意深く聞くようになったように思う。

(3) 問題点、気づいたことなど

今期初めて担当することになった科目であり、試行錯誤に苦しんでいるのが正直なところである。共通領域の選択必修科目であるため、1~4年次の全学科の学生が履修する可能性がある。そして大人数の履修者では授業が機能しなくなることを恐れていたが、幸いシラバスへの記載や初回授業での説明で、かなりの程度参加と作業が求められることが周知されたためか履修者は40人とちょうどよい人数となった。来年度以降もこの人数を保っていけるかがまずは懸念される。履修者の所属学科や学年が違うことのゆえに、国内外の政治問題に関する既得知識や学習意欲にもばらつきがあるため、なかなかレベルを維持させるのが大変であると感じている。学生同士で互いの提出課題の中身を検討し、意見交換できるような仕組みを作りたいと考えるが、そもそも、新聞記事を題材に使っているため、日々情報が更新されていくし、新たな国際問題が生じてその解説が必要になるなど、全てアクティブラーニング的に進めることは困難である科目であると感じている。ある程度アクティブな要素を取り入れつつ、社会常識・教養を身につけるといふこの科目の本来持つ意図をも考慮した展開にすることも大切であると感じている。そのバランスをどうとっていくか、まだまだ検討すべき課題が多いと感じている。

「異なる日本語能力、異文化体験を持つ学生たちが集まる授業」でのALの実践

異文化コミュニケーション（受講生 37名）

1) 異文化環境におけるコミュニケーションの基礎を学び多文化に対する理解力を育むことを目指す授業である。(日本語による講義)

2) に述べるように、それぞれに異なる異文化体験を持つ学生が集まっており、その日本語能力にも大きな差がある。このような中で如何に授業の成果を上げられるか、また、教員からの一方的授業ではなく、彼らの持つ経験や能力を引き出しながら如何に自主的に授業に参加させていくかを目的に、3)にあるようなALの工夫をしている

2) 授業参加者の構成

- 4人の留学生（うち3人は日本語の書き能力が低い）
- 2人の学科学生、国際家庭（2人とも日本語の書き能力が低い）
- 2人の海外留学経験のある学生
- 27人の学科新入生（3, 4名はLDを持つ可能性が有と思われる）
- 4人の観光文化学科の3, 4年生、1人台湾からの交換留学生

3) 成績評価の大きな手段のとしてポイント制度を導入

- ・授業内での発言数（30%）、宿題（30%）、プロジェクト参加（20%）、プレゼンテーションレポート（20%）に対しカッコ内の割合でそれぞれポイントを与える。これによって授業に参加する意欲を高める。
- ・これらの各項目はその一つをすることにより他の項目にも助けになるという補完関係にある。例えば宿題をまじめにやることにより授業での発言も増える。プロジェクトに参加することにより授業での報告、発言の機会も増える、など

4) その他

- ・学生の挙手に対し公平に発言の機会を与える事に傾注。そのためには学生たちの動きに常に注目するよう心掛けている。
- ・日本語が弱い（多文化の経験が多い）学生には特に発言を促したりして授業への積極的な参加をさせるように努力している
- ・毎回の授業でその授業の目的、シラバスの中での位置づけを説明してメタコグニションを促進するよう努力する

\*国際学科1年生に対しての口頭アンケートではこの授業は学生の参加、発言の最も多い授業とのことでした。ただし客観的エビデンスをもつものではないので今後は書面によるアンケートを取ってみたい。

\*このクラスには異なる文化的背景や日本語能力を持つ学生が混在することになるので担当教員にはそれらを理解した上で授業運営する柔軟性が求められると感じている

Class: Intercultural Communication

Number of students: 35

Composition of students: all International Department freshman students, 4 students from the Tourism Culture Department (3rd and 4th year students)

1 second-year student from the International Department who failed the class last year

1 exchange student from Taiwan

Actual average number of attendees each week: 25-30

Among the above students are

- 1) 4 international students, three who have weak Japanese writing skills
- 2) 2 students from international family backgrounds who have weak Japanese writing skills
- 3) 2 students who have extensive overseas experience
- 4) 3-4 students with probable learning disabilities; one with a severe learning disability

Goals of the class:

- 1) To have students gain a more international perspective of the world by learning to question their own preconceptions
- 2) To learn to first investigate a topic about other cultures through statistics and in-depth information before reaching conclusions about cultures
- 3) To have students that their own cultural perspective is just one among many perspectives

Class grading system:

30% of the final grade is based on active class participation. Students are expected to raise their hands and participate in discussions. Students are given points for speaking, whatever their answer. Points given vary based on length and depth of response.

30% Weekly assignments

- students receive points for showing their completed homework. Homework topics are always based on topics that come up in the class, the purpose being to try to persuade students to listen to other student comments as well as to the instructor. The content of the homework is the basis for further discussion or responses in the next class. Students who complete the homework are then able to make more comments in the next class.

20% Community Service Project participation; Weekly News Quiz

International Department students are required to participate in the department community service project, The Amigo Classroom, a project for tutoring immigrant children living

in Yachiyo City. Note: this required participation in this project has been approved by the International Department faculty. Students are required to participate in the project for three consecutive Saturday mornings each term. At the project, each university student is paired with a child and assists the child with their schoolwork, usually either kokugo or math. The university student also plays with the children during the break time. Students file a report for each session they participate in and give an oral report in the next class session. Other students have been trained to ask questions about the experience at the Amigo Classroom. The teacher often uses the content of these oral reports to address various aspects of intercultural communication in class.

All students are required to participate when the children from the Amigo Classroom visit the university festival in the fall. Class time is used before the festival to prepare questionnaires for the children and after the festival to have students reflect on their experience. A few students earn extra credit in the class by helping to create a promotional flyer and the event materials outside of class.

Students receive a variety of points according to the amount of their participation in this project.

#### Weekly Quiz:

In order to have students take an interest in world events, a weekly quiz about international news is given at the beginning of the class. These quizzes are student-generated. Students are divided into groups of three to four, with each student preparing a different question for the class. The group gives the quiz orally at the front of the class. At the end, the teacher asks seated students for the answers. Quiz scores are recorded on class attendance cards but the results make a very small contribution to the final grade.

In addition to encouraging students to take an interest in world affairs, students are told that being informed about national and international events will help them when they apply for jobs in the future.

#### 20% Group Presentation; Final Report

Students are divided into groups of 3-5 students. Each group chooses a country to investigate and create an imaginary resident of the country. Students do a presentation of about 10 minutes in front of the class explaining one day, one year, and the lifespan of the character. Statistics from that country and comparison to Japan are required.

Equal presentation time for each member is required. Other students are required to ask pertinent questions at the end of each presentation. Students receive both a group and individual grade.

Each student is required to do an individual report on one aspect of the country chosen by their group.

Efforts made by the instructor

- the most important thing is to make sure that I notice who is raising their hand and give equal opportunities to all students
- to learn the various cultural backgrounds of the students and incorporate that information into the class. In particular, I try to involve the international students and the students from international backgrounds because they are the ones with the intercultural experience but are reluctant to contribute due to lower language proficiency
- to make a few remarks each class about the purpose of the material for that day and how it fits into the general curriculum

\*\* in an informal survey of the International Department freshmen who are taking the class, I was told that this class required more student participation and generated more student response than any other class they were taking.

\*\*\* teaching the class every year requires an enormous amount of flexibility because the student composition for any year brings vastly different experiences to the class

#### 1) 授業概要・ねらいなど

国際言語文化学科の1年次必修(前期・基礎ゼミA、後期・基礎ゼミB)で、学習の習慣をつけること、基本的な学習スキル(図書館利用、文章構築、要約、論文、発表、アンケート調査・集計等)、ICTスキル等に慣れてもらうことなどを基本的な目的としています。さらには、「考える」ということをかなり意識させ、与えられたものではないところからの気づきを促そうともしています。

また、授業外で行なう作業を少しずつ多くしていき、授業ではそれについての説明や考える方向についてのヒントなどとともに、考える時間を提供。さまざまな考え方があることのサンプル提示。比較的多くのタスクを授業外にさせているため、課題が多いという不満も多数あり。

★教科書：『知へのステップ - 大学生からのアカデミック・スキル -』くろしお出版

#### 2) 授業振返(ノート・LMS)

毎回の授業では、授業内容を振り返り、新たに知ったこと、理解できたこと、わからなかったことなど、教科書に該当箇所がある場合には、それらを参照したりしつつ、ノート整理を行ない、授業後3~4日程度以内に提出(LMS(Moodle)を利用)。(木曜1限授業に対し、週末位までには、ということで促し、実際には、翌週の授業前日までは提出可能に。)それに対して、原則、すべての提出内容について、フィードバックコメントをLMS内で記し、個別的なコメントを返し、必ずコメントには目を通すよう指示。(ノート回収確認は、前期は4回程度(授業設定上、その日のうちに返却が可能だったため)。後期は、授業内確認を含め、現時点で2回)

#### 3) 新聞作業(前期初回から毎回の課題)

日常の世間のことに目を向けてもらうため、ほとんど習慣化していない新聞を読んで、毎週3つの記事を取り上げて、ノートにまとめさせています。課題内容は、少しずつ増やし(ただ読むだけから、ノートへのまとめ、まとめたことの授業内での発表、記事内容についての考え、関連することを多少なり調べたことを含めたスライド作成、スライド利用の発表、質疑など) <後期には、原則、授業日前日までにまとめたりしたもののスライドは事前提出>

#### 4) ディスカッション(授業内、LMS)

教科書記載のトピック、学生が新聞作業の流れで選んだトピック、担当者が選んだトピックなどについて、賛否が分かれるようなものなどについて、個人で考えさせたり、まわりの意見聴取をさせたりしながら、発表までさせることもあり。(前期のテーマとしては、18歳からの選挙参加など)

その他、LMS 内で、新聞作業での考えを提示したうえで、それについてのコメントや別の考え方を投稿参加させ、次の授業で（投稿内容は受講者全員が確認できる仕組みにはなっているが、きちんと確認していない受講者も若干あり）、いくつかの投稿内容について、コメント。ディベートの形にまで持っていけるといいとは考えているが、なかなか、そこまでは達していない状況。

#### 5) その他

上述のアクティブラーニング絡みでは、個人やグループでの作業自体はどうにかなっていても、成果物の口頭発表については、なかなかうまくいかない点あり。

人前での発表機会については、前期は、指名する形をとっていたものの、後期では、「ボランティア発表」と称して、指名されずに挙手により機会を自らとる形を推奨。（前に立たずに、質問まではできる受講者もいるものの、ボランティア発表となると、今年度では、現段階では、全体の3分の1以下。本年度よりも人数の少なかった（20名程度）昨年度では、もっと自らの挙手による発表があったのとは、多少状況の変化あり。受講者数の問題かどうかも含めて、現在、検討中。）＜指名によらないでも発言ができる受講者は、もともと一定数は存在しています。＞

もう少し、受講者同士でのグループワークを多くし、その中での発表などもとりいれていくことで、成果を挙げられる可能性についても、模索中。

以上

ミステリーの謎解きで加点

Reading I/II (受講生 11 名)

1) 授業のねらい

二つにレベル分けした上のクラスである。1回の授業で1話を読み切るようにしている。ミステリーの短い教材を使って謎解きをする授業であるので、細かいところまでチェックしながら英文を読んで内容を確認する。

2) 授業方法

一人3行から4行ずつ読んで訳させる。最後の謎解きは内容理解が間違っているとは不可能であるため、細かな部分まで必ず意味を確認させる。必要に応じて文法事項の復習をし、文化的な事柄も付け加える。最後に謎解きをさせ、見事に事件を解決すれば5点を加点する。

3) AL に関わる話

毎回謎解きができなかった学生に5点を与えている。英語がうまく訳せなかった学生でも教員の説明を聞いて納得し最後の謎解きには参加できるため、このポイント制は「自ら発言させる」ことには大変有効であるように思われる。易しい問題の回にはほぼ全員が挙手するので、加点の合計点の少ない学生から指名している。難しい回にはヒントを出して部分点も与えるようにしているが、他の学生の答えからヒントを得ることも多く、集中力が途切れないところが特に良い点である。

この授業では「代名詞が何を指しているかを常に考える」「前置詞を疎かにしない」などの癖が付いたようである。

以上

調査して分かる面白さを分かち合うことを目指して

言語文化演習（受講者数6名）

・科目について

「言語文化演習」は国際言語文化学科の教員複数名（今年度は3名）が担当する3年生対象のゼミである。私は韓国の文化や社会をテーマにし、韓国に関する既存の研究及び文章のまとめ方、もくじの立て方、調査方法、論文や資料の集め方、論文の書き方などを指導している。本ゼミでは最終的に1万字以上の論文を書くことが目的とされている。

前期は主に論文執筆のための方法の指導と韓国の文化や社会に関する文献の輪読、「調査」実践、後期は論文執筆に向けた指導を行っている。「調査」実践として大学内でのフィールドワークも試みたが、今回は輪読と「調査」体験に関連したグループ調査発表について紹介したい。

(1) グループ調査の流れ

韓国の社会文化を理解するための文献として小林孝行編『変貌する現代韓国社会』2000年 世界思想社を取り上げた。受講学生を2つのグループに分け、1章分（論文1編）を分担して要約、発表させる。その後、各グループで要約した内容に関して疑問点や現在とは異なる点、変化している点などを話し合わせ、グループ調査のテーマを決定させた。

現在との相違点に容易に気付けるよう、あえて最新の文献は使用しない。

(2) グループ調査の方法

各グループ調査テーマ決定ののち、発刊後約15年間もしくは現在の出来事について、文献やインターネット、などを利用し調査を行う。すでに韓国の統計庁HPから統計資料を得る方法を教えていることから、韓国の統計資料を利用して調査を進めるよう指示した。

(3) グループ発表へ

グループで調査した結果はレジュメとしてまとめ、ゼミ内で発表を行った。発表後は質疑応答の時間を設け、発表内容を改めて考え直すきっかけを作った。質疑応答で出た質問への答えの準備及び内容の修正を行い、2回目の発表をさせた。2回の発表をもってグループ調査発表は終了となる。

・おわりに

論文執筆前の練習を兼ねたグループ調査発表であるが、最初から一人で行なうのではなく、グループで協力・分担することで負担が軽減するとともに責任を持って取り組めるようである。また、一つの論文（文章）に向き合って「疑問な点はどんなところか」を考え出す作業は、論文テーマ選びにも役立っていると感じられる。

疑問点を見つけ出し、その疑問点を調査して明らかにすることの面白さを感じ、達成感を味わってもらうことがこのグループ調査発表の目的である。また、グループ内及びゼミ内でその面白さを分かち合うことができるようになることが望みである。しかしながらグループ内での分担量が均等ではなく、できる学生が多く担当することになってしまうことが、今後の課題である。

写真の撮り方を学ぶ

観光写真（受講生数:18名）

まずは、いろいろな写真を見てもらう。

⇒それぞれの写真を撮るときのちょっとしたコツを話し、そのいくつかを理解してもらう。

⇒そのうえで、実際に、学生に写真を撮ることを体験してもらう。

⇒半年の授業が終わったときには、写真の撮り方がちょっとはわかるようになっている。そんな状態にまで持っていくことを目的に、毎回授業を進めていった。

キーワードは：「写真はワク」「角出し、串刺し、首切りは駄目よ」など

写真の説明の例：

○ヨーロッパ、石畳のある風景→日が落ちて真っ暗になるちょっと前、小雨が降っているとき、外に出て写真を撮ろう。石畳に光が反射して、とてもきれいなのだ。

○大きな建物→まず、枠を決める。距離をとる。その前に、人を配置する。一人一人の表情がはっきり分かるように撮る。

実際に写真を観てもらい、こんな話をしながら、写真の撮り方について、

⇒「こうすれば、ちょっとはちがった写真が撮れるんだ」

ということを、感じてもらってから、実際に、教室から飛び出して、大学キャンパス内で、テーマを決めて、写真撮影の実践。

テーマとして挙げたのは、

「集合写真」「学内で一番好きな場所」

○集合写真の場合：カメラマン役の学生が、撮影場所、学生の並び方など、すべて決め、他に学生は、カメラマン役の学生の指示通りに行動する。

⇒学生が撮った写真を教室内で、プロジェクターで写し、その写真についての講評を行う。

他の学生にも発言してもらう。

⇒あくまでも、前向きに、ポジティブ思考で、「写真がどんどん撮りたくなるように」

情報演習C (プログラミング) (2年生対象 30名程度)

1) 授業のねらい

- ・プログラミングの基本的な理論や考え方を理解することができる。
- ・基本となるプログラムを書き、動かすことができる。

2) 授業方法の概要

Web上に全15回分の資料、参考サイト・参考文献などをアップした教材を用いて、課題提出、授業の感想なども送信してもらいながら、授業を進めている。

授業においては、まず、前回の資料を見てポイントを確認し、次に各回3テーマ程度で構成した流れを見て、今回の授業の流れを把握する。そのうえで授業内容に入る。押さえておきたいポイントに注意しつつ、課題を提示し、各自演習していくが、質問等にこたえつつ、時には学生同士教えあう状態となっている。

3) 工夫している点、心がけていること

アップした資料を参照し、今自分が何を習い、何を習得しておくべきなのか、これからどう進んでいくのか、を各自チェックできるようにしている。チェックテストもはさみ確認しながら進めていけるようにしたことで、中だるみを防ぎ、最後まで集中できているのではないかと思う。

また、学科によって、実習などが入り欠席を余儀なくされる際も、いつでもどこでもスマートフォンで閲覧が可能なため、最低限、その間授業で何をやっていたのか等必要なポイントが把握できる。それにより進度に遅れることなく進めていくことができる。また適宜、アンケートを取りながら、質問への回答や、スピード等の調整を図っている。

4) 反転授業について

一部のアップ(情報入門での資料)にとどまっていますが、この授業(情報演習C)でも実際に操作しプログラミングしていくときのスピード感などを見てもらうため、動画をアップできる環境構築を進めています。そのため、反転授業に移行できる準備は整ってきています。実際に行うことになれば、次のようなプランが考えられます。

- まず予習として教材を見て、あるいは実際にパソコンを用いて、学習を進めてもらいます。
- 授業時は、最初の15分で3人ほどのグループを組み学んだことをシェアします。
- 次に予習が活かせるような課題を提示し、30分ほどかけてグループでプログラムを組みます。
- 組みあがったプログラムを発表(15分程度)し、グループ間でシェアしながら、各自の学習深度を深めます。
- 最後に20分程度で各自、プログラムをまとめ、苦しんだところ、困ったところ等感想を含め提出、評価につなげます。

グループ学習のフリーライダー（ただ乗り）対策

心理学実験実習（2年生対象 50名程度）

1) 心理学は実証の科学であること、その実証の仕方を自ら実験者、被験者になって体験的に理解することを狙いとする授業である。

2) 授業方法の概要（2コマ連続授業）

学生を5名程度のグループに分けて、あらかじめ用意した実験の手引きに従って実験を行う。実験の目的や手順のあらまは、事前に全体講義をしてからグループに分かれてさらに、手引きを読ませながら、それぞれのグループが自律的に実験に入る。教員（自分）は、机間巡視しながら、気が付いたことを指示・注意をする。

データをグループ全員で共有し、あとは告示が手引きをみながら、データ処理、レポート作成をする。

3) ALにかかわる話「グループ学習のフリーライダー（ただ乗り）対策」

グループ実習であるので、実習そのものはそれなりに能動的に参加しているようにみえる。それでも、一生懸命やる1人、必要なことはする3人、さぼる（フリーライダー）1人、の例の「2：6：2」の原理が機能してしまう。グループのメンバーを固定してしまうと、この傾向はますます強くなってしまふ。

対策としては、レポート点に加えて、実習中の態度や参加度をモニターしながら、それを成績評価にも使うことをあらかじめ宣言し、学期末の総括的評価をすることではないかと思いつつ、つい目先の50人を動かすための実験準備にかまけてしまった。

あの手この手を使って：講義+新聞記事を読む+DVDを見る+感想文+調べて発表

障害心理学Ⅱ（2年生対象 30名程度）

1) 授業のねらい

障害とは何か、障害をどう捉えるかについての認識を深め、視覚障害・聴覚障害・言語障害・肢体不自由・知的障害・発達障害について、それぞれの心理学的基礎となる知識を修得し、併せてそのような障害のある人々にとって生活していく上で必要な支援は何かを理解することをねらいとしている。

2) 授業方法の概要

障害とは何かという問題意識を持たせ、その捉え方を具体的に理解するために、各障害に関する基礎的な内容（用語・定義・分類・原因・発達とその特性等）を講義している。授業内容は毎回2～3枚のプリントにまとめ配布しているが、重要と思われる箇所・学生に考えてもらいたい部分は空欄にし、授業中に学生を指名し答えさせている。一人1回は当てるように配慮している。

3) 工夫している点、心がけていること

自分の身近に障害児・者がいないと、授業内容がどうしても上辺だけの知識に終わってしまいがちである。そこで、障害児・者に関する新聞記事を一緒に読んだり、DVDを見たりして、何を感じ、どう考えたかを書く。また、一人1回、障害に関して興味を持ったこと・疑問に思ったことを調べてA4一枚にまとめ、全員の前で発表する。などの活動を通して、障害は自分にも実際に関係する問題なのだということを少しでも感じてもらうようにしている。

### 講義科目におけるグループディスカッションの活用

- 現代社会と福祉 I, II (1年生 45名程度：福祉心理学科、臨床心理学科)
- 相談援助の基盤と専門職 I, II (1年生 25名程度：主として福祉心理学科)
- 精神保健福祉相談援助の基盤(基礎) (1年生 20名程度：応用心理学部)
- 精神保健福祉援助技術各論 (2年生 20名程度：応用心理学部)

#### 1) 授業のねらい

当該科目は、社会福祉士、精神保健福祉士国家試験受験資格取得のための科目であり、厚生労働省が指定したシラバスによって教育すべき項目が定められている。その内容は多岐にわたり講義内で取り扱う情報が多いため、学生たちの理解を深めることが困難であった。講義中に質問を促しても反応が少ないため、昨年まではリアクションペーパーを用いて授業後に質問を提出させて次回の授業の最初に説明する方法を取っていた。しかしこれも一部の学生が活用するだけで多くの学生は単純な感想を記入するだけに終わっていた。

そこで学生同士で授業の中で解ったことと疑問を持ったことを振り返る時間をとり、グループ記録として提出させることで積極的な授業参加を促せないかと考えた。また、学生同士で振り返ることで授業内容が記憶に残りやすくなることを期待した。

#### 2) 授業方法の概要

授業終了前10分間を使って学生たちを4～6名程度のグループに分け、司会と記録を決めて話し合いを行わせる。出席簿も兼ねた用紙に授業でわかったこと、疑問点・質問をそれぞれ記入させる。個別での質問がある場合は、氏名を記載して質問を記入する。

グループごとに提出された用紙は、発言回数や役割(司会、記録)、わかったこと、疑問点をデータベース化し、授業への参加度を測る評価ポイントとする。

記載された内容は、毎回整理して次回の授業の冒頭で公表し、ポイントを復習するとともに質問等に回答する。

#### 3) 工夫している点、心がけていること

- ・各自、最低1回は発言するよう発言回数(0, 1~2, 3回以上)をチェックさせている。
- ・短い時間で内容を絞れるように様式を作成し活用している。
- ・話し合いの時間が最低限10分は取れるように授業運営に気をつけている。また各グループを回り、話し合いを促したり参加していない学生に声をかけたりしている。
- ・理解した項目や質問数により得点を0～3ポイントとしているほか、司会や記録を担当した学生には特別ポイントをつけ、積極的な話し合いを促している。

#### 4) 課題

- グループは、近くに座っている学生を人数で適当に割り振っているため、グループメンバーによって内容の深まりに差が出てしまう。
- グループでの評価となるため、フリーライダー的な学生が出てきてしまう。
- 話し合いが苦手な学生は入りづらいこともあるかもしれない。
- 授業の理解に効果があったかどうかの評価を検討する必要がある。
- 自宅学修の推進には効果がないため、検討が必要。

### 演習科目における携帯端末の活用

精神保健福祉援助技術演習（基礎）（2年生 14名：福祉心理学科、臨床心理学科）

#### 1) 授業のねらい

当該科目は、精神保健福祉士国家試験受験資格取得のための科目であり、精神保健福祉士に必要なとされる基本的な相談援助の技術を身につけるための演習を行うものである。

演習科目のため、学生同士でのグループワークが重要となるが、今年度は福祉心理学科と臨床心理学科の学生が履修しており、両学科の学生の交流も進めながらの授業運営が必要となった。演習場면을視覚的に振り返られるように携帯端末のビデオ撮影機能と編集機能を用いることを実験的にやっている。

#### 2) 授業方法の概要

演習のグループ分けは、毎回クジを作成して福祉心理学科と臨床心理学科の学生が交流できるようにしている。相談援助技術のうち、対人コミュニケーションが求められる演習の際にあらかじめ口頭で学生に了解を得た上で演習場面の録画を行う。

授業後に再生スピードの変更や画像にコメントを入れられるアプリケーション（iOS版 DartFish Express）を用いて映像を編集し、翌週の授業の最初に上映してポイントを復習する。

#### 3) 工夫している点、心がけていること

演習場面は、体験的な学習として効果が大きいですが、演習を行っている最中の表情や視線、動作などは覚えていないことが多い。できるだけ学生たちに自分の動きを自覚してもらえよう視覚に訴える方法として取り入れている。撮影する機材はスマートフォンなどの携帯端末で、撮影していることをあまり意識しないで演習ができている。編集もスマートフォンなどで使えるアプリケーションを使用しているため費用があまりかからない。

また使用しているアプリケーションは、スポーツ選手の教育などでも用いられているものの簡易版であり、すぐにフィードバックできる点が優れている。可能な場合は、当日の授業内で振り返られるようにしている。

#### 4) 課題

- ・研究費の制限（携帯型端末もパソコン扱いとなるため、追加購入ができない）もあって機材を教員の私物を活用せざるをえない。プライバシー保護という点では課題がある。
- ・学生同士での撮影、振り返りを行わせられればさらに理解が深まると考えられるが、ア学生が使える端末がなく、アプリケーションの導入も困難。（撮影だけであれば学生たちの私物のスマートフォンを活用できるかもしれないが、アプリケーションを揃えるのは難しい）
- ・データの保管や扱いなど、倫理的な課題は検討の余地がある。

## 1. 演習の目標

- 1) 長期目標：現役で社会福祉士の資格を取得する
- 2) 短期目標：①授業以外で勉強時間を確保する。1週間に7時間という具体的数値を設定（3年次前期）
  - ②施設見学と現場実習を通して、就きたい職業をイメージする（3年次前期から後期半ば）。
  - ③自分自身と資格について改めて結びつけ、資格取得に向けた勉強法を考える（3年後期半ば～春休み）

## 2. 演習方法の見直しの背景

従来、学科の中で、学生の授業外の勉強時間が少なく、加えて、学生がそれぞれ自習や学習の方法をよく分かっていないようだという話題が出ていた。さらに、国家資格を現役で取得した学生の中に、専門的な仕事が続かず辞めてしまうケースも少なからずあるということも課題として挙げられていた。そこで、今年度の演習では、仕事と資格を結びつけて考えること、各々が資格取得に向けて考えると共に学習をすることをいかにして演習の中で学生に伝えるかが本演習の大きなテーマであった。そこで、関連科目と結びつけたり、FD集会で学んだ方法を活用すべく演習方法の見直しに取り組んだ、勉強の仕方また、勉強時間の確保については、昨年度のFD集会における本多先生のご発表を参考にした。

## 3. 具体的な進め方

最初の演習時間に、各々が何故資格を目指すのかを改めてディスカッションした。そして、その週より、昨年度のFD集会における本多先生のご発表を参考に、毎週、学生に勉強時間と内容をLINEで報告してもらうこととした。前期は、チャートを作成し、先週の反省点と今週の目標と具体的な学習分野を書き込み今週の勉強のモチベーションとした。後期は、現場実習で一旦中断したものの、毎週のゼミ課題を設けることで各自勉強時間を確保するようにしている。加えて、社会福祉協議会主催の施設見学（前期）と現場体験（後期）を活用し、現場での体験を通じ、各々のキャリアと自身の資格とを結びつける機会を設けている。

以上のように、授業外でのLINEでの学生とのやりとり、福祉現場での体験、演習におけるディスカッション、授業外での課題設定を取り入れて福祉心理学演習を進めている。

## 4. 関連科目と関連事業

下記の科目の内容を聞いたり、感想を聞いたりしながら、授業科目を横に結びつけることで総合的にキャリアを考えることが各々にとって重要であることを伝えている。

相談援助実習、相談援助演習Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、キャリアデザインE F

千葉県社会福祉協議会福祉人材センター主催の「福祉のしごと施設見学会」「福祉の職場体験」

## 1. 授業の概要

社会福祉士受験資格の必修科目の一つで、資格との関連で、1クラス20名を超えることができないため、今年度は受講生31名を2クラスに分けて行っている。本報告の「相談援助演習Ⅱ」ではさまざまな生活問題・対象者別の援助事例に取り組み、個別援助における援助過程などから相談援助技術の使われ方や解決に向けてのアプローチを学ぶ。

## 2. 授業の進めかた

1回目では、授業の進め方を説明すると同時に、グループビルディングを兼ねて全員で自己紹介を行う。また、「事例研究」のやり方についてレクチャーする。2回目以降はグループに分かれて事例研究に取り組むが、15名の履修者を事例ごとに3グループに分け、クラス内の全員が一度は一緒のグループで事例に取り組むようにする。事例への取り組みは、前の週に事例を配布し、各自で読み、わからない制度等については個々で調べてくることとする。一つの事例には2～3週をかけ、各グループで事例ごとに設定されている課題について話し合いを行い、グループでの結論をだし、最終週にグループごとに発表を行う。グループディスカッションのルールとして、司会者、記録者、発表者を事前に決めるように指示している。発表に対して、他のグループからの質問の時間を設け、それらも踏まえて、最後に教員がまとめのコメントと必要に応じて解説等を行う。その後、各自が一連の事例への取り組みを振り返りシートに記入し、翌週には教員がコメントと評価（三段階。評価ポイントは1回目の授業で説明するが、返却時にも必要に応じて一言添えている）を書き込んで返却する。

## 3. この方法での成果（と考えていること）

- ①回数を重ねるごとに、グループディスカッションが活発になる。
- ②回数を重ねるごとに、課題への取り組みが積極的になる。
- ③回数を重ねるごとに、振り返りシートの記入において「考察」ができるようになる。

## 4. 改善課題

①客観的に見て、グループ活動に積極的に参加していない学生が少数いる（1クラスに1～2名）。しかし、当該学生は十分に参加していると自己評価している場合が多い。

②事前に調べるべきこと、知識の修得状況や努力の姿勢において、学生間の差が大きい。グループ活動の中で、優秀な学生や真面目に調べたり、資料を持ってくる学生に便乗する学生が少数いる（1グループに1名程度）。

③繰り返し具体的なアドバイスをコメントしても、考察に至らない学生がいる。

## 5. AIとしての今後の発展の可能性

現在は、グループごとの発表は発表時間までに黒板に書き、それをもとに解説・まとめを行っているが、グループごとに iPad やノートパソコン等を割り当てることが可能な環境（この演習に限って言えば、1クラスに3台あれば十分）であれば、パワーポイント等のソフトを使用して発表内容をまとめ、そのデータを使って共有することが可能となる。そうすることで、発表内容をデータとして保存することができ、今後の授業に反映しやすくなる。

地域ボランティア（集中）（1年生22名）担当：別府・朝比奈

1. 授業の目的（シラバスより）

ボランティア活動に関する知識を身につけ、実際の体験を通じて、ボランティア活動の意義を学び、今後、積極的に参加することへの意欲を高める。

2. 授業報告

6/20(土)の車椅子サッカー大会ボランティア報告会について紹介する。

(1) 本授業の活動の意義と意図

学生がボランティア活動をより有意義なものとするためには、自己の体験を他者と共有・共感するグループ学習が必要である（岡本ら，2005）。

そこで、以下のような展開で、車椅子サッカー大会のボランティアについて振り返りを行った。

また、このような活動を通して、学生同士の関係形成や、自分の意見を伝える、相手の話を聞くなどの基本的なコミュニケーションスキルの学習などもめざせると考えた。

(2) 授業展開

	学生の活動	教員の活動・留意点
導 入	報告会の目的を知る ①発表する ②共有する ③アドバイスや提案をしあい、今後さらによくなるようにする	報告会の目的を伝える
展 開	①机をコの字型に移動する ②各自、短冊に記入する 赤：よかったこと、嬉しかったこと、よくできたこと等 青：困ったこと、嫌だったこと、よくできなかったこと等 白：解決方法、もっとこうしたらいい、等 ③一人ずつ発表する（挙手制）。係の学生は短冊を分類し黒板に貼る。 ④出された内容について、自由に意見を発表する（挙手制）	・司会進行 ・意見が出ない場合指名する ・批判や否定が険悪な雰囲気につながりそうだったら、「よりよくなるためには」という視点で改善点に着目させる ・机の移動、短冊の記入など適宜指示
ま と め	①教員からのコメントを聞く ②本時のまとめと感想をボランティアノートに記入する	・ボランティアそのものの良かった点と改善点を伝える ・本時の活動の良かった点を中心に伝える

### (3) 評価～成果と課題

- ・色別の短冊を使用したことで、記入がスムーズにできた。
- ・記入の時間は少々かかったが、学生はよく考えて記入することができた。
- ・記入する時間は自由な雰囲気にしたため、近くの学生と話し合っ書けことができた学生もいた。
- ・適度な緊張感と明るい雰囲気であった。
- ・「発表は苦手」と言っていた学生が、自分から挙手して発表することができた。
- ・他の学生の発表をよく聞いていた。
- ・上記の成果について、コメントとして教員から褒めることができた。
- ・授業の感想では、「次回のボランティアではこうしたい」、「自分が考えつかなかった意見が聞けた」といったことが挙げられた。
- ・教員が司会進行をしたが、いずれは学生にその役割をバトンタッチする必要がある。
- ・「話し合いがしやすいように机をコの字型に移動する」ことが、教員の指示がないとうまくできない（みんな適当、という感じ）。
- ・学生が、成果をその後のボランティアや授業に生かされたか、の評価があいまいである。

### 3. 授業計画（12/15時点・一部実施済）

日時	形式	内容	担当
4/11(土)	講義	ガイダンス・この授業について	別府
4/18(土)	講義	・ボランティアとは何か（健スポと合同）	別府
5/23(土)	演習	・コミュニケーションの基本	朝比奈
5/30(土)	講義	・対人援助の基本	朝比奈
6/6(土)	講義	・車椅子サッカー大会ボランティア事前学習 ボランティア活動に参加するうえでの心構え、留意点	別府
6/14(日)	実践	・車椅子サッカー大会ボランティアに参加しよう	別府・朝比奈
6/20(土)	話し合い発表	・車椅子サッカー大会ボランティア報告会	別府・朝比奈
6/27(土)	講義	・「おにいさん・おねえさん子ども電話相談」について ・夏休みの予定	別府
夏休	実践	・自分で探して参加するボランティア（大学からも情報提供する）	別府・朝比奈
9/24(木)	話し合い	・夏休みのボランティア報告会 ・翠樟祭の企画について話し合い	別府・朝比奈
随時/前日	実践	・翠樟祭の準備	別府・朝比奈
10/31(土)	実践	・翠樟祭	別府・朝比奈
11/1(日)		フリーマーケット／プレイルーム解放	
11/28(土)	話し合い	・翠樟祭の反省会	別府・朝比奈
10～1月(平日)	実践	・電話相談の見学	別府・朝比奈

心理データ処理Ⅰ（心理学統計）（必修 70名程度）

心理データ処理Ⅱ（今年は選択に変わり 33名、昨年までは必修で70名程度）

社会心理学（臨床と健スポの3年生 120名程度）

社会臨床心理学演習（受講生は5名）

学部では以上の授業と「卒業研究」を担当しています。

担当は心理データ処理（統計学）など主に講義科目です。学生が発表したり、グループで議論したりすることは基本的にはありません。

統計学では「統計的仮説検定の論理」（偶然か必然か？）を

①偶然と仮定（帰無仮説の設定）

②実験や調査

③偶然の可能性（確率）計算

④確率的判断（1%5%を基準に偶然の可能性の大小）で偶然 or 必然を判断。

の4段階でとらえ、③偶然の可能性（確率）を計算するツールとして $\chi^2$ 、t、F分布が現象の性質に応じて利用される、という考え方を柱としました。そして、全員にサイコロを振らせたり、シェーハートのNormal Chipsによる模擬実験を行い、黒板で問題を解かせたり、ビデオを見せたりしながら、授業を行っています。わからないことがあれば、話の途中でも、いつでも質問するようにいい、1人でも分からないという者がいれば何回でも丁寧に答えるようにしています。（1人が分かりにくいところは他の多くの人も分かりにくいはずだから）。「社会の中の統計」という10分程度のビデオ（放送大学の「身近な統計」で放送していたシリーズ）を見せたこともありますが、内容が高度すぎるようでした。「サイデル先生の授業」（NHK テレビ）のように学生と対話しながら、ダイナミックに授業が進められればよいのですが、「知識の積み重ね」の授業なので、本質をできる限りわかりやすく、直感的にもわかりやすい映像や模擬実験を多用しつつ、授業を進めるように努めました。このような授業内容では、時には「グループ学習」も有効だと思いますが、基本的には、正確な知識をわかりやすく学生に伝えるということが大切だと思います。（12月17日のFD研修における向後先生の講演では、心理統計の授業で10分程度のビデオ授業とグループワークのALを行っていたようですが、形式は分かるのですがビデオ授業とワークの中身が分からないので、どのように評価すべきか分かりません。）

ただ、この機会に「社会の中の統計」ということで、新聞や雑誌に現れている興味深い統計を学生に探してもらい、発表させようかなどとも考えています。あるいはレポート課題にしてもよいかもしれません。私見としては、やはりALに適した授業科目と、先生が熱意を持って学生に伝えていく（講義する）授業科目があるように思います。

### 1) 授業のねらい

乳幼児から高校生くらいまでの発達過程における行動や精神の臨床的な問題を取り上げ、それぞれの問題の①特徴、②背景や原因、③対応や治療の3つについて理解を深める。あわせて、資料を読み重要な箇所にチェックを入れる習慣や教員の説明をメモ取る習慣、授業の中で各自の興味点や疑問点を見出し、それについて自分で調べる習慣などの学習スキルの形成をねらいとする。

### 2) 授業方法の概要

教員作成の資料を毎回、配布する。まず、学生各自が資料を黙読して、興味を引いた箇所、気になる箇所にマーカーを使用してマークする（マーカーのない場合、下線を引くこと）を求める。この時間、教員は全員の学生がこれに従事しているかを確認するために机間巡視。

次に、資料内容について教員の説明を行うが、学生には教員の説明内容を資料の余白に書き込むことを求める。教員の説明の後、学生の質問を受け、質疑応答を行う。その後、本時の授業の内容について感じたり考えたりした「感想文」の提出を求める。

最後に次回のときに、本日の興味や疑問に思った内容を自分で調査し、まとめたレポートを提出するように指示して授業を終了する。

### 3) 成績評価の方法…最初のオリエンテーションにて以下の評価方法を紙面に書いて一人ひとりに配付する。

#### ①「授業内容感想文」の内容と回数

\*教員から指示された内容についての感想（考えたことや感じたこと）を毎回書く。15回の授業に対する提出回数でA、B、C、Dを評価する。

A…9回以上、一定の水準以上の「感想文」を提出

B…6～8回、一定の水準以上の「感想文」を提出

C…2～5回、一定の水準以上の「感想文」を提出

D…一定の水準以上の「感想文」の提出が0もしくは1回の場合

※一定の水準以上の「感想文」とは、指示された内容について自分の感想（考えたことや感じたこと）が書かれているもの。他方、「感想がまったく書かれていないもの」や「指示された内容とは関係のないことについての感想が書かれているもの」は「一定の水準に達しないもの」とする。

#### ②「自分調べ」の内容と回数

\*授業終了後に、授業で扱った内容（よく知らない言葉や興味をもった事柄など）について自分で調べ、調べた結果を書き出す（授業中は調べ物をしないで、授業に集中する）。手書きでもワープロでもOK。出典があるときはそれを明記する。15回の授業に対する提出回数でA、B、C、Dを評価する。

A…9 回以上提出

B…6～8 回提出

C…2～5 回提出

D…0 または 1 回の提出

③配布したプリント資料への書き込み内容と提出

\*14 回目の授業時に提出。A、B、C、D で評価。

A…教員の板書や説明に加えて、自分の感想（考えたこと・感じたこと）の書き込みが多く見られる場合

B…教員の板書や説明の書き込みのみで、自分の感想の書き込みがない

C…教員の板書や説明の書き込みがほとんど見られない場合

D…提出なし（これだけで成績は D となるので注意する）

④受講態度

\*人の迷惑になる私語、途中退出、その他の行為は教員から注意される。A、B、C、D で評価。

A…教員の注意を全く受けない場合

B…教員の注意を 1 回受けた場合

C…教員の注意を 2 回受けた場合

D…教員の注意を 3 回受けた場合

\*注意を 4 回以上受けた場合は、これだけで成績が D となるので注意。

⑤以上の 4 つの観点からの評価を総合して成績を決定する。

4) まとめ

出席するだけで、授業中に寝ている学生、白昼夢を見ているようにボーとしている学生、隣の人と私語を続けている学生、スマホをいじり続けている学生などを一人でも減らしたい気持ちから、上記のような授業方法に至った。

なお、数人の学生による話し合い活動を取り入れたことがあるが、いつも一人で出席する学生数人が途中から授業に出席しなくなったので止めた経緯がある。しかし、そのような学生を出席しやすくするグループワークの工夫の必要性を認識している。

### 1) 授業のねらい

「子どもの心理相談」を担当できる知識を身につける（乳幼児から高校生までを子どもとする）。それと同時に自分の興味や疑問を発展させていく学習体験をすることをねらいとする。

### 2) 授業方法の概要

子どもの発達臨床に関する市販テキストをまず各自、黙読していく。

読みながら、興味をもった用語や内容、重要だと思った用語や内容にマークをつける(以上を【興味・重要内容】とする)。また意味のつかみにくい用語にもマークをつける(以上を【意味あいまい用語】とする)。

次に読み終わったあと、興味・重要とマークした箇所をノートに書き出していき（【興味・重要】の見出しの下に順番に数字をつけて書き出す）。次に、意味のつかみにくかった用語をノートに書き出す（【意味あいまい】の見出しの下に順番に数字をつけて書き出す）。以上の作業が終了したら、まず上記の内容について近くの数人のグループでシェアリングする。その後にグループからの発表をうけて全体でシェアリングする。

最後に「自分調べ」の内容を決める。次回の授業までに「自分調べ」をする。「調べた内容は毎回ノートに添付していく。最後の授業終了後、ノートを提出する。成績の評価は、授業への取り組み、「自分調べ」、試験結果を基準とする。

### 3) まとめ

講義形式の授業のときは、ときどき欠席したり、出席しても睡魔に勝てなくて目を閉じたりしている学生もいたが、この形式の授業に変えたところ、そのような学生は見られなくなった。特にグループワークのときの学生たちは楽しそうにシェアリングをしている。他方、毎回の自分調べは、他の授業よりも、学生の負担となっているかもしれない。

学んだことを身につける授業の試み

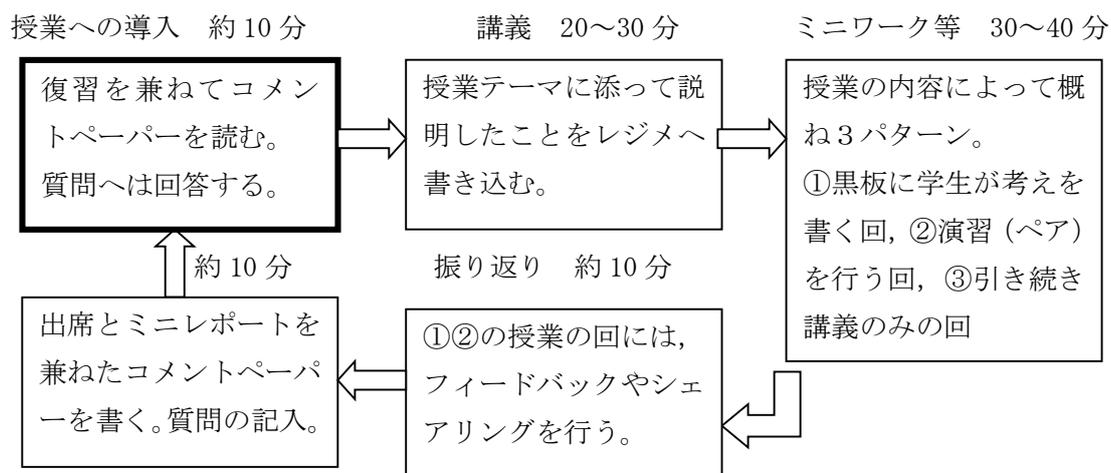
カウンセリング心理学（受講生 58 名）

【授業の目的】

学習したカウンセリングの理論や方法を、青年期の課題（自分自身とのつきあいや他人とのつきあい、進路選択、学業など）にいかすことを目的としている。

【授業の流れ】

おおよその授業内の流れは以下の通りである。(1) 15 回分の授業概要をまとめた手製のレジメをオリエンテーション時に配付する。(2) レジメの空白を授業を通して自分で書き込んで完成する。(3) 授業の内容によっては生徒が前に出て自分の考えを黒板に書いたり、レジメに添った演習を行う。(4) 授業後に出席とミニレポートを兼ねたコメントペーパーを書く。次回の授業開始時に数人のミニレポートを読み、質問には回答する。



【課題】 授業内容によっては講義だけの回もあり、すべての回が上記のようなサイクルではない。15 回



を通して変化を持たせている。ワークでは学生に積極性が見られている。学生自身の能動的な活動を引き出すことが今後の課題である。

協同学習の場としてのパソコンを用いた演習

臨床心理学演習（6名）

【学習目標】

臨床心理学についての卒業論文を作成するための知識と技能を身につけることを目的として行っている演習である。

【授業概要】

前期は、パソコンで心理統計ソフトを用いて心理統計の活用法を学び、また、臨床心理学の論文を参考にして、心理統計の実際の利用法について学ぶ。後期は、臨床心理学に関するテーマを設定して、グループでの調査研究を行い、各自レポートを作成する。

【授業の特色】

臨床心理学科では、1年生に「心理学基礎実験」を、2年生に「心理学統計」と「心理学研究法」を必修授業として学生に履修させている。3年生ではそれらを受けて、4年生で卒業論文を書くための準備段階として、演習においてグループでの文献研究や調査研究を行ってきた。けれども、3年生に進級する前の段階までの学習では、4年生で卒業論文を書くために必要とする心理統計を用いた心理学の研究法を身につけるまでには至っていないという状況が続いた。問題点として、少人数での指導が必要なこと、心理学統計や研究法をある程度修得するには繰り返し学ぶ機会が必要なことを痛感していた。そこで、3年生の演習で再度心理学統計を学び、グループでの研究により研究法を体験させることにした。

前期授業では、受講者全員に各自1台のパソコンを割り当て、統計パッケージソフト SPSS を用いて、仮想データを使い、心理学研究法で最低限必要とされる検定法を学ばせた。その際に、授業者はその日の課題とそれを達成するために参考にする図書の箇所を指示し、あとは学生が個別にパソコンに向かって課題を解決することで心理学統計を学べるように工夫した。また、授業者が教えるだけでなく、課題が早く終わった学生がまだ理解の不十分な学生に教えることにより、互いに支援をしながら学習が進められるように配慮した。そのためにもお互いのコミュニケーションを頻繁にとらせるようにした。その結果、前期は全員がほぼ毎回授業に出席し、課題解決に苦労しながらも楽しみながら授業に参加していた。

後期授業では、全員で研究テーマを一つ決めて、共同研究を実施させた。前期にできあがったチームワークが活かされて、テーマや研究方法の決定し、質問紙を作成して、調査を実施した。データ処理については、再度各自がパソコンを用いて行い、前期で学んだことを基礎にしながら、それを自分たちの研究に応用していった。現在は、データ処理が終わり、各自がレポートを書く準備を進めている。

心理学統計や心理学研究法は、学生にとっては学ぶのが容易ではない課題である。グループを作ってお互いに支援し合うというグループの力を活かしながら授業を進めることで、学生の主体性を引き出し、課題に取り組ませることができたように思う。

プチ・専門家プロジェクト

産業臨床心理学演習（3年生対象5名）

1) 授業のねらい

- a. 卒業論文に向けて関心のあるテーマを明確にし、その概念、歴史、研究方法などに詳しくなる。
- b. その過程の中で、文献の見つ方や、心理学の研究方法について理解を深める。
- c. プレゼンテーションの方法について理解を深め、実践できるようにする。

2) 授業方法の概要

- a. 「プチ専門家（＝同学年でいちばんそのテーマに詳しい人）」となることをひとつの目安に、そのテーマの概念定義、類似概念との違い、研究史、実践の歴史、研究方法、課題などを、他の履修者にプレゼンテーションする。
- b. プレゼンテーションは、「心理学の基本的な学習を終えている人」を対象とすること、プレゼンテーション機器を使用して行うこと、配布資料を作成することを条件として課している。また、心理検査など実践活動を行うことも可とする。
- c. プレゼンテーションを聞く学生は、「ピアレビュー評価シート」（Figure 1）に評価を記入する。評価シートは授業後にプレゼンテーションを実施した学生に渡される。
- d. 各プレゼンテーションの後で、「ピアレビュー評価シート」の記載内容を元に、15分程度のディスカッションを行う。

評価する事項		評価
プレゼンテーション内容	テーマについて理解できたか？	
	用語の言い方、難解は適切だったか？	
	発表者がこの分野について、どのくらい知っているか？	
	発表者についての感想や質問	
その他良かったこと、感じたこと		
ディスカッション	相手のポイントや、自身の発言は適切か？	
	質疑・応答は適切だったか？	
	議論はわかりやすく進められているか？	
	ここが良かった！（できるだけ具体的に）	
ここをこうすると、もっと良くなる！（できるだけ具体的に）		

※フォーマットは、発表者がこれらに準拠するように書いてください！

Figure 1. ピアレビュー評価シート（B5 サイズ）

3) 工夫している点, 心がけていること

- a. 学生は関心のあるテーマはそれぞれが持っている。しかしそれをプレゼンテーションできるまでの体系的な理解、表現をすることに困難がある。そのための道筋を授業初期に教えられるよう、工夫している。
- b. 「プレゼンテーション」という言葉は、授業での「発表」とは異なるイメージを持たせるために使用している。単にやったことを発表するのではなく、「相手にわかりやすく伝える」ことを重視し、なにを、どんな場で、何のために、どんな相手に伝えるかを意識させるように心がけている。
- c. ディスカッションや評価シートが、プレゼンテーション実施者を「吊し上げ」にするような雰囲気にならないように言葉がけや、評価シートの項目作成に気をつけている。

グループ活動に抵抗をもつ学生への対応

心理学研究法 I・II (2年生対象 60名程度)

1) 授業のねらい

この授業は、演習を通して体験的に心理学の基本的な研究法（観察法：時間見本法・事象見本法、面接法：構造化面接・半構造化面接、質問紙法など）について理解することを目的としている。

2) 授業の概要

各研究法についての講義の後、取り上げた研究方法に関する演習課題に、小グループで取り組む。最終的には、収集したデータを全体で共有し、分析結果を考察していく。

3) グループでの演習に参加出来ない学生の実態

授業内容の性質上、ある程度のグループ活動は避けがたいが、仲良くない人と一緒に作業することを極端に嫌がる学生が一定数存在するのが学科の実態である。このような学生にも同質の教育を提供するためには、どう対応するべきかを模索している。グループ活動に抵抗をもつ学生の反応としては、“グループでの演習中は、机に伏せている”、“グループ活動中だけ教室から出ていく”、“一人で作業をする”などである。これらの学生に、なぜグループに抵抗をもつのか理由をたずねると次のようなことが語られる。

- ・話せる人がいない。
- ・(一部の人同士の仲が良いと) みんなの輪に入れない。
- ・自分がグループに受け入れられるか不安で、緊張する。

4) グループに参加できない学生への対応 (大きく3つに分かれる)

①グループに入れたい人同士のペアやグループの形成を促す

お互いに必要以上の干渉をしないため、割り切って作業だけをするタイプの学生の場合は、意外と上手くいくことがあった。

②個人での参加

一人であれば演習に参加出来る学生の場合は、グループで活動することを無理強いしていない。グループは回避したが、授業には参加できたという肯定感がもつ学生が見受けられる。

③授業時間外での演習

授業時間外であれば、自分の友だちと演習課題に取り組むことが可能な学生の場合は、それを認める。

5) 今後の課題

対応の効果を検討しながら、グループ活動に抵抗をもつ学生をドロップアウトさせないために有効な仕組みを見出したい。

オーディエンス・レスポンス・システムの活用

臨床心理査定法Ⅰ・Ⅱ（それぞれ主に1・2年生対象：50名程度）

1) 授業の概要および背景

臨床心理士の4大業務のうちの1つとされる「臨床心理学的査定」に関する講義である。いわゆる“心理検査”の授業であり、学生は多くの検査を実際に体験しながら学んでいく。心理検査の体験は学生の多くに楽しみを与えるように感じられる。

しかし、“質の高い査定”を行うためには理論など抽象的なものも理解する必要があり、この種類の話題になると途端に受講者の反応が悪くなり、注意は向いているのか、内容を理解しているか教員側も不安になる時が多かった。

2) オーディエンス・レスポンス・システムの活用

そこで、オーディエンス・レスポンス・システム（ARS）の活用を検討し、自身でスマートフォン用のアプリケーションを作成するなど以前から模索してきたが、最近 Socrative という ARS の Web アプリがあることを知り、積極的に活用している。Socrative は、送信者の名前を隠すなど受講者が恥ずかしがらずに発言しやすい環境を（現在のところ無料で）整えられる点、結果のまとめファイルがエクセル形式でダウンロードできるなどが特徴である。

これを用い、講義の最後に受講者全員に送信内容が見えるような状態で、疑問点・感想などを各自のスマートフォンから送らせ、不明点や感想を全員で共有する機会を提供している。あくまで主観ではあるが、以前よりも学生の講義への意欲は高まっているように感じられる。

なお、以前は“ガラケー”の所持者も一定数いたが、今ではほぼ100%がスマートフォン所持の状態であり、実用上はほとんど問題とならない。

### グループ編成の工夫と構造化されたグループワーク

コミュニケーションの心理学 (3年生対象 60名程度)

#### 1) 授業の目標

コミュニケーションを心理学的観点から紐解いていくことを目的とした授業である。

#### 2) 授業方法の概要

授業は、講義とグループワークで構成される。毎回、フィードバック（前回の授業のふりかえり）15分、講義30分、グループワーク30分、全体シェア15分の時間配分を意識して行っていた。

#### 3) ALにかかわる話 「グループ編成の工夫と構造化されたグループワーク」

グループの編成にはいろいろな考え方があると思う。本授業は、できるだけ、普段のグループをバラバラにして、交流のなかった、これまで、コミュニケーションの機会が少ない学生を集めた5~6名のグループにした。そして、15回そのグループでグループワークをしていくことを課した。

ここで、必要なのは、グループ編成の工夫である。初年度教育から関わってきた受講生だったので、リーダーシップを取ることが向いている学生、リーダーをフォローするのが得意な学生、記録やマメな作業が得意な学生、発想豊かなアイデアが出せる学生など、学生の特徴が把握できていた。そこで、最初は、得意なことができるような役割分担になるよう、リーダーや副リーダー、書記などを教員が指名した。5回の授業の後、役割を教員が指名して交代する。授業の前提作りが重要で、インストラクションで、何度も強調するのだが、同じワークでも主観的な差（自分にとって(a)安全にできるワーク、(b)少し背伸びして勇気を出してやってみるワーク、(c)それ以上は自分が混乱してしまうワーク）が出るので、無理せず、自分ができるワークに参加するよう促した。学生には、不公平感が生じる前に、こういった個人差を理解してもらうことで、集団的な圧力でグループワークが成り立つのではなく、自主的な参加でそれぞれの学びに貢献できることを強調する。よって、成績評価も、グループ発表の善し悪しではなく、「グループワークを通して学んだことは何であったか」をレポートで評価することを伝え続ける。

グループワークは構造化され、(a)1名で考え記録するワーク、(b)その記録したことを伝えあう2人組のワーク、(c)2人組のワークの内容を他己紹介のかたちで5~6名のグループにシェアするワーク、(d)グループで話題になったことをクラス全体にシェアするワークといった形で、少しずつハードルが上がっていく。そうすることで、安全感を得ながら、当日グループに出たけれども何もなかったというフリーライダーの学生を減らすことをねらう。

授業をふり返り、学生の満足度はある程度得られたが、まだまだ課題は多い。特に、効果的な時間配分や気づきから知識獲得へのモチベーションにつながっているかどうかのチェックは当面の課題である。

- 1) 「コーチング心理学」は主に指導者の資質、能力、参加者を指導するうえでの心理学的視点、マネジメント力等についての知識と情報を獲得し、実践に役立てることを目的とする。
- 2) 授業の大きな柱のひとつは、コーチ・指導者のあるべき姿を具体的な姿として学生がイメージし、それに基づいて自分の指導者像を形成することにある (3コマ連続授業)。
  - ① 4～5人のグループを作り、宿題の「理想とする指導者とは」「不適切な指導者とは」について、付箋に書き写し、模造紙に貼っていく。
  - ② KJ法を活用して、メンバー間で意見を交わしながらワードをグルーピングしていく。教員は巡回しながら気づいたことや疑問を投げかけ、グループ内のワークを活性化していく。
  - ③ グルーピングし終わったら、そのまとまりに関して「ネーミング」するが、これもメンバー間での討議の下で決定するように促す。
  - ④ 全体でのプレゼンテーションのための資料を作成 (様式は教員が準備) し、各領域を二人で行う。他のグループのプレゼンテーションも踏まえて、メンバー間でのシェアリングを行う。
  - ⑤ グループワークから導き出されたそれぞれの指導者像について、プレゼンテーション、シェアリングを含めて、各学生はレポートを作成、提出する。
- 3) グループワークなのでこのシリーズのグループは固定して進める。各授業の最後には、リアクションペーパー作成も課すので、積極的な学生やグループにとっては学びとグループワークの成果は達成できているものと推察できる。また、グループ内での役割も決めて (司会、プレゼン担当、記録など) いるので、さぼる学生は少ないようである。しかし、休む学生が生じたときには、メンバー不足となり作業が進めにくい事態を招くこともある。

#### 課題

- ・ グルーピングの工夫
- ・ リーダーの選任と作業効率、役割
- ・ 欠席学生発生に伴う授業の進度

MTC-12 プロジェクト (My Task Complete 12h-Project)

基礎ゼミⅡ (約10名)

1. 内容

概ね12時間程度(例1時間×12日)でクリアできそうな個人課題を設定し、その実現に向けたロードマップを考え、実践する。受講学生が課題解決能力を修得すること、主体的に学ぶことの意味を体感すること、壁(困難)を乗り越えること、達成感を味わうことなどをねらいとしている。

2. 進め方

①個人課題の発表

- 個人課題(My Task)のテーマを決める
  - 新たに取り組む課題であること
  - 12時間でクリアできる課題であること
  - 自分にとっての“壁”あるいは“チャレンジ”的な課題であること
- 入手すべき情報、資料等をリストアップする
- おおまかな12時間の日程配分を考える
- みんな(担当教員含む)からの意見・助言を求める
- ※次回までにテーマを確定して、計画書『My Challenge Note』を作成する

②個人課題の宣言(Declaration Time)

- グループワーク(5人) ※25分程度
  - 各自の課題テーマ、内容、スケジュール等について発表する
  - グループ内で意見交換し、必要があれば内容、スケジュール等に修正を加える
- デklarレーション & 写真撮影
  - 画用紙にマジックでテーマ等を書き、それを示しながら全員の前で宣言する
  - 宣言した瞬間を写真撮影する

③取組スタート(各自で!)

④個人課題:進捗状況報告・発表会

- 最終報告メールの書式を確認する
- ※提出(送信)期限:201年 月 日(水)午後 時まで

⑤個人課題:達成状況報告・発表会

- 担当教員作成のパワーポイント&配布資料をもとにプレゼン・実演する(1人10分程度) ※『My Challenge Note』の提出

3. 過去の個人課題テーマ (H26・H27 基礎ゼミⅡ)

「英単語 120 個覚えます！」 「四字熟語 33 個 意味・漢字覚えます！」

「けん玉 5 種類の技 3 分間で成功させます！」

「色彩検定で使用する 50 色覚える！」 「天声人語 12 日間書き写し+α」

「全身の骨格と筋肉 67 個覚える！」 「野球のルールブック完全暗記！」

「フリースロー10本連続×4セット (15分以内)」

「リフティング 50 回 バスケ部なのに～」

「秘書検定 2 級テキスト 20 ページ 完全暗記！」 他

「わかる - やってみる - できる」のサイクルを目指して

グループアプローチ (44名)

1) カウンセリングにおけるグループアプローチについての授業である。グループアプローチについて体験的に理解することを目的に、理解すること（わかる）、体験すること（やってみる）、実践すること（できる）を目指している。

## 2) 授業方法の概要

- ・ガイダンスの際にグループ作りを行い、担当回、テーマの割り振りを行う。参考文献を示し、グループごとに検討を進め、授業外の時間（オフィスアワー）に原案を示し、指導を受ける。
- ・第2回目から6回目までは、教員がリーダー（ファシリテーター）を担当して、受講学生は参加者として、グループアプローチを体験する。
- ・第7回目から第15回目までは、各グループが実践計画をたて、リーダーを分担して実践する。

90分のうち、導入、エクササイズ、全体シェアリングで60分を担当した後、次の回の担当者が司会となって、振り返りのためのカンファランス（30分）を行う。その後、出席者全員が振り返りシートに記入をしてそれを担当したグループに渡す。

担当したグループは、それを受け取って、グループ内での反省会を行い、レポートを作成する。レポートは、実践計画書、打ち合わせの記録、全員の振り返りシート、グループ反省会の記録を、表紙をつけて綴じたものを担当日から2週間後までに提出する。

## 3) その他

授業を構造化することで、学生は内容について神経を集中させることができる。当日、全員がなんらかの役割を担当することをルール化することで、全員の参加がある程度は保障されている。

授業の直接的なねらいではないが副次的に、(1) 14週にわたってグループアプローチを体験することで、受講学生自身の人格的成長がみられること、(2) グループでの話し合いの過程で、コミュニケーションや対人関係のトレーニングの機会になっていること、(3) 長期にわたる継続的取り組みを求められることで、達成の満足感と自信が得られていることが伺える。しかし、これらについてのエビデンスはないので、検討することは今後の課題である。

調べる, まとめる, 発表する, 議論する, 振り返る, 改善する

基礎ゼミ I (1 年生対象 7 名)

### 1)ねらい

初年次教育である基礎ゼミ I において, 3 回のプレゼンテーションの実施によって, 「調べる, まとめる, 発表する, 議論する, 振り返る, 改善する」のステップを繰り返し経験し, 大学における能動的な学習態度と学習習慣の形成を目指す。

### 2)授業の概要

基礎ゼミ I は, 大学でのスタディスキルズを修得するための初年次教育と位置づけられる。当該授業では, 話の聴き方, ノートの取り方, テキストの読み方, 文章の書き方, 要約の作り方, レポートの書き方, 図書館の使い方, 情報リテラシーについて一通り学んだ後, プレゼンテーションを 3 回実施した。

1 回目のプレゼンテーションでは, テキスト「ポジティブマインドースポーツと健康, 積極的な生き方の心理学ー (海保博之監修)」より, 興味のあるテーマを各自が選び, プレゼンテーションを行う。当該学生のプレゼンテーションに対し, 担当教員と学生は「プレゼン改善シート」に記入をし, 本人にフィードバックを行う。「プレゼン改善シート」の項目は, 「声の大きさ, 話し方, 説明の速さ」, 「発表態度 (含, 姿勢・表情)」, 「聞き手への配慮」, 「スライドの見やすさ, 解りやすさ」, 「時間配分」について, 「とてもよい」, 「よい」, 「ふつう」, 「もっとできるはず」, 「精進しましょう」の 5 段階で記入する。さらに「よかった点」と「改善点」の記述をする。

2 回目のプレゼンテーションでは, 厚生労働省 (2012) による「健康日本 21 (第 2 次) の推進に関する参考資料」を題材として, ①がん, ②循環器疾患, ③糖尿病, ④こころの健康, ⑤高齢者の健康, ⑥栄養・食生活, ⑦身体活動・運動, ⑧飲酒, ⑨喫煙, ⑩歯・口腔の健康の中から, 興味のあるテーマを選び, 資料を読み解いたうえでプレゼンテーションを行う。当該学生のプレゼンテーションに対し, 担当教員と学生は「プレゼン改善シート」に記入をし, 本人にフィードバックを行う。

3 回目のプレゼンテーションでは, 各自がこれまで学んできた中から, 健康心理学, スポーツ心理学, ポジティブ心理学に関する興味のあるテーマを選び, プレゼンテーションを行う。当該学生のプレゼンテーションに対し, 担当教員と学生は「プレゼン改善シート」に記入をし, 本人にフィードバックを行う。

### 3)工夫している点, その他

「プレゼン改善シート」は, 評価を目的とした「プレゼン評価シート」では決してなく, これらの点を改善したらもっと質の高いプレゼンテーションになるという点を強調したものである。プレゼンテーションの回数を重ねるうちに, ほぼ全ての学生のプレゼンテーションに改善が認められる。また, 健康・スポーツ心理学科の学生として, 心と身体健康づくりのためにぜひ学んでほしい「健康日本

21（第2次）」を題材とすることにより，統計資料を読み解き，内容を理解し，解りやすくプレゼンテーションを行う種々のスキルを習得するのみならず，心と身体の健康づくりの実践につながる知識もまた得てほしいと考えている。

#### 引用

厚生労働省（2012）．健康日本 21（第2次）の推進に関する参考資料

<[http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21\\_02.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippon21_02.pdf)>（2015年12月15日）

教員から一方通行的に知識・技術を教授するだけでなく、教員と学生がコミュニケーションを図りながら、学生が能動的に学習（学修）を進められるようにいくつかの実践を行っている。

- a) 認知心理学（旧科目名：認知心理学 A）は講義形式の授業であるが、受講者数が毎年約 150 名にもなる。こうした授業では、リアクション・ペーパー（コメント・ペーパー）を有効的に利用している。まず、毎回の授業で学生からの意見・質問・批判などを集める。この内容を教員が全て目を通し、その内容を翌週の授業で紹介している。

この方法により、学生は授業に対するコミットメントを高めることができると考えられる。例えば、幼児の表情認知能力について紹介した際には、学生から「自分の家で買っているイヌも家族のメンバーを見分けているように感じることから、イヌにも他者（他個体）の表情を理解する能力があるのではないか」といった質問が寄せられた。これを機会に、翌週には動物の顔認識に関する研究を紹介したが、その週のリアクション・ペーパーには「自分たちの挙げた質問に関する授業だったので興味が湧いた」といった意見が寄せられた。このようにリアクション・ペーパーの利用により、学生の積極的な授業参加と学修を促すことができた。

- b) 心理学実験実習は実習形式の授業で、受講者数は毎年約 50 名である。この授業では、学生が 3 つの心理学実験を体験し、その内容を 3 つの研究論文（レポート）にして提出する。この授業では、実験体験を 15 分、その体験に関する教員からの解説を 30 分、これらの内容についての論文執筆方法を 15 分、そして残りの 30 分を学生のレポート執筆にあてている。

工夫として、(1) 授業の体験→解説→執筆方法→執筆時間というパターンと時間配分は、(授業内容にもよって多少の差はあるが) 15 回の授業を通してなるべく一貫するようにしている。これにより学生は授業への準備ができる（次は解説をするなど予想が立つ）。また時間配分を決めることにより、集中力を切らすこと無く望める。また (2) レポート執筆の時間には、教員が教室を巡回して学生の疑問やつまづきに個別に対応するようにしている。その際には、例えば「この文章でレポートとして正しいか」といった質問を受けても、答えを告げるのではなく、「なぜそうした文章にしたのか」と聞き、学生の思考のプロセスを理解するようにしている。そして思考のプロセスに間違いがあればそれを正すなどして、次の文章を書いてもらう。これにより、常に学生が主体的に思考し、自分の考えを文章にするトレーニングになると考えられる。

プレゼンテーション，ディスカッション，実験体験学習

スポーツ心理学演習（3年生対象5名）

1) 授業のねらい

自らの問題意識に基づいてテーマを設定し，スポーツと心の関係についての文献レビュー，実験を中心とした学習を通じて，スポーツと心の相互関係への理解を深めることを狙いとした授業である。

2) 授業方法の概要

学生らが自ら興味・関心のあるテーマを見つけ出し，その内容について10分間のプレゼンテーションを行う。その後，現場への応用などについて15分程度のディスカッションを行う（1回の授業につき3人ずつ発表）。

また，運動と心に関するテーマを1つ設定し，実験計画の立案から実験の実施，データ集計および分析，考察，実験における問題点・改善点に至るまでの実験レポートを作成する（卒業研究の簡易版という位置づけ）。

3) 工夫している点，心がけていること

学生の自主的・主体的な学びを引き出すために，学生らの興味・関心のあるテーマを自ら選ばせるようにしている。また，我流のプレゼンテーションの防止，質の高いディスカッションを促すために，初めの数回の授業において，プレゼンテーションにおける基本的なスキルやスタイル，質問をするための発表の聞き方（どのような問題意識を持って発表を聞けばよいのか）について指導している。

論文や専門書籍を読むだけでなく，実際に実験をする経験を通じて，より卒業研究を意識しやすいように配慮している。

### 運動理論を運動経験から理解する

スポーツ運動学（1年生対象 50名程度）

#### 1) 講義のねらい

本講義のねらいは、学生が運動の習得や熟練、ないしは運動の指導・伝承に関する人間学的運動理論について理解することである。運動理論とは具体的に、人間の運動時における運動感覚意識（キネステーズ）といった内在的感覚に迫る内容である。学生によるスポーツ運動学の運動理論把握によって、スポーツ実践（指導）現場において学びを活かせるものとする。

#### 2) 講義内容の特徴と伝達における問題

上記に示してあるように、本講義においては、スポーツ活動や日常の運動のなかで、人間（私たち）の運動感覚や意識といったものを主に取り扱う。しかし、運動感覚や意識といったものは物的に証明できるようなものではないことから、運動感覚に関する理論を理解することは決して容易くないことが講義内容伝達における問題と考える。

また、私たちの日常運動やスポーツ活動を支えているものの多くは無意識（受動性）のレベルにあるため、スポーツ活動を低年齢期から行い多様な運動経験を有する学生でも、自らの運動感覚について無自覚のままであることは少なくない。学生の優れた競技歴の有無にかかわらず、である。

そのため、運動理論に関する説明をただけでは、学生は理解ができないことが多い。運動理論に関する言葉や知識は記憶できるが、その理論がどういった意味を持ち、私たちのスポーツ実践や指導とどう関わっていて、どういった意義があるのか、理解できていないのである。

#### 3) 問題解決方法としての講義方法

上記のような問題を克服するため、4つの工夫をしている。

- ・運動理論が現れている動画をプロジェクターで流す。
- ・誰もが経験したことがあるような事例（例え）を紹介する。
- ・学生（グループ）に事例を考察させ、発表させる。
- ・リアクションペーパーに「講義へのリクエスト（質問など）」を書かせ、次回の講義で質問に答える。

運動理論が現れているスポーツの動画や指導場面を編集し、学生に観察させているが、学生自身の運動経験と結びついていないという点において、乏しい。教員からの事例紹介も、同様である。そこで、運動理論が理解できているかどうかの確認の意味も含め、学んだ運動理論が自らの運動経験のなかで現れていると思われる事例をグループで考察させ、発表させる。ただし、上記の3つのステップを通して行わなければ、学生自身から事例を出すことは難しいということが講義を繰り返す中で確認できた。

また、講義中に質問は受け付けているものの、学生が講義中に質問することは難しいようである（質問ができる場の設定ができていないことも要因である）。そのため、リアクションペーパーに講義を受けた感想と、講義に関するリクエストや質問を記入させている（講義開始当初、学生は講義内容をそのまま記載していたが、それではノートと変わらないため廃止させた）。その質問内容等を受け、次回の講義では学生が理解できていない部分を重点的に解説することになっている。

#### 4) 講義方法（グループでの事例考察）のメリット・デメリット

グループでの事例考察方法（AL）における、メリットとデメリットを反省的に捉えた。

##### ●メリット

- ・グループ内で発表することで、他人の意見に触発され、自らの実体験と重ね合わせることができ  
る。その結果、個人で考えさせ発表させるよりも多くの事例があげられる。
- ・身近な体験例を知ることによって、運動理論に関する理解が深まる。
- ・個人で考えるよう指示をすると、運動について理解ができない学生は事例があげられないが、グ  
ループ内の意見から運動理論に関するイメージがわき、発言回数が増える（参加意欲が高まる）。

##### ●デメリットとその対策

- ・グループでの事例考察時間、それぞれの発表等を含めると、所要時間がかかる。  
⇒ただし、運動理論の説明のみでも学生は理解しきれないため、事例考察と講義形式のバランス  
を考えていく必要がある。
- ・グループ内での会話の円滑さに差異が生じる。  
⇒ディスカッションが円滑になるようグループ編成を行う。

基礎造形における学びについて

基礎造形 I (1年生対象 47名程度)

1) 保育者、教育者として必要な造形の基礎について理解することを狙いとする授業である。保育や教育に必要なノンバーバルコミュニケーションや、ビジュアルコミュニケーションについて、感覚を通して、体験的に学ぶ。

2) 授業方法の概要

授業の冒頭で、各自にワークシートを配布し、素材や作品、事例等を示す。その後グループにて、素材体験や作品制作を行い、感覚的・体験的に学びを深める。担当教員は、机間巡視しながら、気付いたことを助言・指示・注意する。

学生同士で作品やデータを検討し、活動の振り返りを行いワークシートに記入する。

ワークシートと作品や資料をクリヤーホルダーに収め、各自の資料として役立つポートフォリオを作成する。

## 教育実習指導におけるアクティブラーニング事例

教育実習指導（約 143 名）

3年生教育実習指導の授業では、8人グループで実際の模擬保育を行い指導案作成や、実際の指導の在り方について学生同士意見交換しながら提案し、より良い実習に向けて学び合う授業を行っている。

自分たちで考え保育を構想する力の育成を目指し、ロールプレイングを通して子どもの気持ちを体験したり、教員としての立場や役割を演じることで言葉のかけ方に気づいたりする経験となり、実習前に欠かせない授業である。

<準備するもの>各グループが行う模擬保育に使う教材や材料を自分たちで購入する。  
(担当教員が学生に立て替え払いをし、後日教務関係の授業用教材費で精算する。)

<内容>

### 第1段階

1. ABC各クラス1グループ8人、6グループを編成し、全体で18グループとなるグループを作って、模擬保育で行う内容の話し合いを行う。  
視点・・・発達段階 ○歳児○月を決める。教師役と子ども役を決める。  
一斉活動20分程度と、帰りの会10分程度合計30分の模擬保育を考える  
※活動のつながり、経験や季節との関連を考慮して保育を構想する。
2. グループのメンバー一人一人が一日指導案を作成し、持ち寄る。8人で討議し、一つの代表的指導案を作成する。それに基づいて教師役の学生は保育の流れや手順を考え子ども役の学生は想定した子供を考え、それぞれ演じ方の工夫をし、練習する。

### 第2段階

5月20日前後から6月いっぱい6週間を使って、順次授業内で模擬保育を行う。  
模擬保育を行うグループは、指導案を学生全員に配布し、模擬保育を見る学生は指導案を見ながら保育も見えていくことができるようにする。実際の言葉かけや指導の手順など、保育終了後に模擬保育を行った学生の振り返りをする。その後見ていた学生がそれぞれ感想や意見・提案など考えを述べ合う。その後担当教員から評価を伝える。

### 第3段階

検討や協議を加えられた内容を含めて新たに指導案を書き直して一人一人が新たな改善された指導案を提出する。この指導案の提出を評価の対象とする。

<評価反省>

学生が、話すことや調べて教材を購入することなど協力し合うことが求められるので、コミュニケーションの苦手な学生も授業を通して他人と話し合い、自分の思いを出し合うことができた。また、互いに教材研究し多様なアイデアを学び合うことができた。

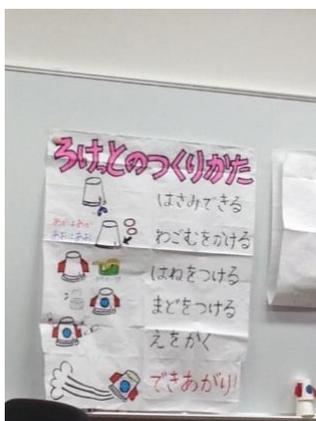
幼稚園での実習でコミュニケーションが求められるため、実際の模擬体験は生活体験の不足がちな現代の学生には経験してほしい授業の形態であると捉えさらに工夫を重ねたい。



(教師役の学生が説明をしている場面)



(子ども役の学生が演じながら子供の気持ちに気づいていく場面)



(教師役の学生が説明をしている場面)

事例とレポート、プレゼンテーション、グループディスカッション

保育の心理学（2年生対象 50名程度×3クラス）

1) 授業のねらい

子どもの心身の発達について、保育実践と関係づけながら理解することを目的とする。保育現場での実践に対応できる知識を習得するために、乳幼児期を中心に、子どもの心や体の発達を理解し、発達に応じた子どもへの援助やかかわり、保護者への支援などについて、具体的な事例をとりあげながら考えていく。自分が保育者の立場になった場合の視点を大切にしながら、日常的な保育の中で起こる様々な具体的事例について考えてみてほしい。

2) 授業方法の概要

具体的な事例について、1つの事例につき2週にわたって検討していく。1週目の授業の最初1時間ほどで、その回の事例に関わる子どもの心や体の発達についての説明を行い、その後具体的な事例についての問題を示し、各自の回答をその場で小レポートにまとめてもらう。2週目には、9～10名の学生に、各自の回答について発表してもらい（レポートも提出）、個人発表終了後に、全員でその回の事例についての討論を行う。

後半の5回の授業では、9～10名のグループごとに、1つの事例について検討する。1週目の事例についての説明の授業以降は、グループに分かれて、それぞれの進行状況を毎週小レポートで報告しながら、最終週に、グループごとのプレゼンテーションを行う。

3) 工夫している点、心がけていること

保育現場で実際にみられる事例をとりあげるよう心掛けている。現場では、短い時間での判断が求められることが多いが、実習に出る前の段階で、少し時間をかけて、今ある自分の知識によって、具体的な事例への対応を考えてみることは重要であると考えている。また、発達心理学等で学んでいる知識が、現場でどう生かされるのかについて、具体的事例に当てはめて考えることによって、座学と実践を結びつける手がかりにもなると考えている。

さらに、他の学生の考え方や意見を聞くことで、自分にはなかった考え方や、見方を見つけることもできること、グループで事例を検討することで、「チーム」として考えることのメリット、デメリットがあることなどについても、考えてもらえるように、アドバイスをしている。

### 英語を読む力をつけるリーディング

英語リーディング演習 I/II (2年生対象 20名程度)

#### 1) 授業のねらい

簡単な英語で書かれた物語（今年度は『トイ・ストーリー／トイ・ストーリー3』）を使って、英語らしい発音・アクセント・イントネーションに気をつけながら、物語を理解し心を込めながら読むことができるようにすること、聞いている人が聞いているだけで内容を理解することができ、また感動できるような読み方ができるようになること、を目的としている。

#### 2) 授業方法の概要

教科書の物語を、読み方を中心に学び、発表させる。初めのうちは教員がモデルを示し、どこで切って読むべきか、どのような声の大きさ・高さ・イントネーションで読んだら聞いている人が理解しやすいかなどを学び、練習して発表する。慣れてきたら、学生に考えさせ、それにしたがって読み、発表させる。さらに慣れてきたら、実際に子どもたちが聞いていることを想定して、教員所蔵の Big Books や図書館所蔵されている英語の絵本からそれぞれ1冊選び、練習し、クラス全員の前で発表する。

#### 3) 工夫している点、心がけていること

この「英語リーディング演習」の特徴は、「読み」を重視していることである。内容理解のために大まかに訳したり、文法的なことの確認をしたりはするが、メインはあくまでも「読む」ことにあり、「訳す」ことではない。そのために使う教材はわかりやすい物語を選び、単語や文法なども難しいものは選ばない。学生は、その多くがいずれ保育士、幼稚園教諭、小学校教諭につくことを考え、大きな声で読むことができること、人に伝わるように読むことができること、意味を込めた読み方ができること、感情を込めた読み方ができるとこ、聞いただけで感動できるような読み方ができること等を中心に学ばせ、発表させている。

ディズニー映画を使った英語リスニング力アップ

英語リスニング演習 I/II (3年生対象 20名程度)

1) 授業のねらい

ディズニーの長編アニメーション映画の DVD (今年度は『アナと雪の女王』) を使って、この作品に使われている程度の実用的・日常的な英語を聞き取る力をつけることを目標とする。同時に、英語独自の言い回しや欧米の生活習慣などについても知識を得る。

2) 授業方法の概要

教員があらかじめ空所のある映画の英語台本を作成し、学生は、何度も繰り返して流される DVD 音声を聞き、その空所に英語を埋めていく。学生は答えを皆の前で発表し、皆で正解を得る努力をする。最終的に教員が作った正確な英語台本と比べて、全員で確認する。

3) 工夫している点、心がけていること

できるだけ学生から正解を引き出すことを心掛けている。ディズニーのアニメーション映画には難しい単語・表現・文法はあまり多くないので、何度も繰り返し聞くことによって徐々に慣れてきて正確に聞き取ることができるようになり、またそれにより自信もついてくる。難しい単語、聞き取りにくいところなど、教員の手助けが必要と判断した場合は、様々なヒントを出して、また何度も聞かせ、できるだけ学生から正解を引き出すようにしている。

体験学習を踏まえてのトライアド・インタビュー

ハンディキャップ論 II (3年生対象 111名)

1) 授業のねらい

本授業では、状況や環境と深くかかわる障害に焦点をあてることで、学生が、ハンディキャップ（障害）を生じさせるバリアに気づくことの重要性と状況に応じた支援の必要性を理解することを目的としている。

2) 授業方法の概要

学生は、本授業のねらいを達成していくために、主に次のような流れで学習を行うという説明を受ける。まず、ハンディキャップのある方の対応等に関する講義を受け、視聴覚教材を視聴し、支援の基本を学ぶ。次に、障害を生じさせる構造の例を学びつつ障害体験学習に必要な教材を自作する。さらに、自作した教材を用いながら、学生がペアになり、交代で支援者役と障害者役を体験する。その上で、トライアド・インタビュー方式で、自分が体験したハンディキャップの内容を振り返りながら、ハンディキャップに対して必要だと感じた支援、状況に応じた支援の限界と改善案について自分の考えをまとめる。

3) 工夫している点、心がけていること

大学の授業等で障害に関する知識を蓄積してきた学生が、ハンディキャップ（障害）を自分にかかわる問題として考えられる機会を得るだけでなく、その経験をインタビューされ、文章化していくことで考えを深められるように心がけている。

なお、トライアド・インタビューとは、教育工学を専門としている向後千春が名付けた手法で、話し手、聞き手、記録係の3人組で、意見を文章化していく方法である。特に、受講生の意見を聞ける時間が制約されている大人数の授業では、全員が自分の意見を述べ、文章化する手法として効果的であると思われる。

1) 授業のねらい

教育は社会格差や不平等の是正に資するべきであるが、他方で不平等の維持・再生産のための装置ともなりうる。教育のもつそうした社会的機能への気づきが、本授業のねらいである。教育をめぐる平等／不平等という題材を手がかりに、本授業が学生にとって、自ら価値判断し、他者と交渉し、意見表明するという、市民性の実現の機会になってほしいと考えている。

2) 授業方法の概要

授業の冒頭で本時に考えてほしい問題を示し、30～40分程度の講義や視聴覚教材などを手がかりに、問題への解答を小レポートとしてまとめてもらう。その後それをもとに、3～5人程度のグループでディスカッションを行い、その結果をプレゼンテーションしてもらう。

3) 工夫している点、心がけていること

学生が取り組みやすいよう、問題は「正解」が無く、かつ学生にとって身近でつい発言したくなるようなものを設定するよう心掛けている。4年間の教育に関する専門的学修活動の総まとめ段階にあり、さらには将来を見据えて就職活動中であるような学生にとって、これまでの学修活動を振り返り、自己の立ち位置を再認識し、また一緒に過ごしてきた仲間の大切さに気づけるような時間にしてほしいと願っている。

グループ研究発表、模擬保育、ディスカッション、レポート

子どもの文化史演習（3年生対象 36名）

1) 授業のねらい

「ひなまつり」「端午の節句」「七五三」「お正月」など子どもにまつわる伝統行事を知り、保育現場で役立てるために、それらの由来、歴史などについて調べ、発表を通して、知識を共有し、さらに模擬保育によって実践のスキルを身に着ける。

2) 授業方法の概要

2～3名のグループに分かれ、研究発表（45分）のテーマとなる子どもにまつわる伝統行事に関する文献調査を行い、調査をもとに発表のためのレジュメづくりをする。また、発表の際に、取り上げたテーマを手遊び、歌、ペープサート、絵本、紙芝居等の手段で子どもに伝えることを目的とした模擬保育もグループ独自で考え、準備をする。

授業では、このように準備された研究発表を行い、発表後、全員によるディスカッションを行う。また、発表者は研究発表の内容をレポートにまとめ、学期末に提出する。

3) 工夫している点

調査に際して、適切な文献を参照しているか等、準備段階における学生のアドバイスを行う。模擬保育ではオリジナル性を大切にすよう、なるべく手作りのものを取り入れるよう指導。活発なディスカッションが行われるように、発表のポイントを、教員から補足的に示す。

レポート作成、グループディスカッション、発表

教育制度論（3年生対象 130名程度）

1) 授業概要

教育専門職を目指す者として必要な教育制度に関する基本的知識を習得することが本授業の目的である。基本的に講義形式の授業であるが、地方教育行政制度の説明の際に、アクティブラーニング形式の授業を試みた。

2) 授業方法の概要

まず授業外の学習として、受講生は自分の住んでいる市町村の教育委員会について調べてレポートにまとめ（A4用紙1枚）、授業時に作成したレポートを持参する。授業では5名程度のグループを作り、学生はグループ内で自分の作成したレポートを発表する。グループ内の全員が発表した後、学生は共通点や相違点を踏まえながら市町村教育委員会がどのような組織で何を行っているのか、またそれに対する感想をグループで話し合う。グループで話し合った結果についてA4用紙にまとめ、いくつかのグループには発表してもらい、次回の授業では教育委員会に関する知識が定着するように、またより深い内容や批判的考察を含めながら講義形式で説明する。

3) 感想

自分の地元のことを調べるので興味をもちやすく、また名前は聞くけど実態はよくわからない存在である教育委員会というテーマも手伝って、意欲的にレポート作成ならびにグループワークに取り組んでくれる学生が多かった。学生がグループワークを積極的に実施するためには、興味・関心の持てるテーマ設定と、議論するための前提となる知識（事前学習）が必要であることを実感することができた。また、調べたり話し合ったりしたことで、そのテーマに関する講義形式の授業も普段よりも集中して聞いてくれていると感じた。

4) 今後の課題

受講者数が多いため、うまくグループワークができるか不安であったが、多くのグループが活発に議論し、グループの見解を上手にまとめてくれており、やってよかったと感じる。しかしながら、アクティブラーニング基本図書の一冊として回覧された溝上慎一の『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（東信堂、2014年）には、アクティブラーニングの形態を導入することだけではダメで、その内容、つまり学生の学習内容の深い理解を目指すことが大切であると書かれている（105-106頁）。また、「内容的に薄っぺらい、ちょっとインターネットで調べてまとめて、議論したり発表したりするようなアクティブラーニングを何度か見てきて、筆者はとても表面的だと感じたし、残念な思いがした」（147頁）とも書かれている。自分の授業では、学生に対して一定のレベルの事前レポートを求め、それに基づいての活発な議論があり、またグループ以外の発

表を聞く機会を設けたことで広がりのある学習が達成できたと思っているが、自分自身が溝上の要求するような意識レベルで授業に取り組めたわけではなかった。アクティブラーニングは単に学生が意欲的に取り組めばいいのではなく、それを通じて深い理解を目指すものであるということをしっかり確認して、今後授業改善に取り組みたい。

課題解決型学習，体験学習，グループワーク

算数（3年生対象 30名程度）

1) 授業のねらい

算数は、小学校で指導する教科の中でも特に苦手意識を持つ学生が多い教科である。そのような学生の意識を少しでも改善できるよう、本講義での体験的な活動や、グループワークにおいて1つの課題に対する多くの解決方法を見出すこと等を通して、算数を学習することの良さや楽しさを知ってもらうとともに、教材研究の大切さに気付く機会になってほしい。

2) 授業方法の概要

授業の冒頭で課題を提示し、児童の立場にたって課題を解決する方法を各自紙面にまとめる。その後、5名程度のグループで各自の考えを持ち寄り、1つの課題に対する多様な解決方法を講評し合ったり、よりよい解決方法を考える。最後に、各グループの結果を全体で共有する。

3) 工夫している点・心掛けていること

課題が頭の中でイメージしづらい場面の場合には、学生が取り組みやすいよう、その場面に関する教材を実際に作成したり、操作するなどの体験的な活動を取り入れている。例えば、空間図形の場合には実際に展開図を作成し、空間図形の特徴を把握しやすくする。また、グループワークにおいては適宜助言し、多様な解決方法を見いだせるよう心掛けている。

ミニレポート、グループ課題の実施

保育内容研究（健康）（1年生対象 48名×3クラス）

1) 授業のねらい

将来、保育・教育に携わろうとしている学生には、子どもの「健康」について幅広い知識や問題意識が必要である。本授業では、子どもの健康にかかわる基礎的な知識を身に着けるとともに、知識を利用したさまざまな対応の仕方を学ぶことが目的である。単に知識を暗記するのではなく、学生一人一人が「健康」に対する興味・関心を持ち、子どもへのかかわり方を考える機会となることを期待する。

2) 授業方法の概要

全体講義の際は学生に問いかけ、事例の問題解決方法やその理由などを考える時間を与える。数回の講義後、「あなたならどうするか」等の課題を設けたミニレポート作成を課している。また、3～5名のグループに分かれ、与えられた課題をグループごとに考えたのち、プレゼンテーションを行う。

3) AL へ向けて

学生同士がアイデアを共有し、視野を広げる機会が多くなるよう心掛けている。1年次ということもあり、今後の学習や将来計画の基礎となる子ども学への理解、関心が深まる一つのきっかけとなるべく、できるだけ多くのトピックに触れ、自分なりの意見を持てるようなサポートをしていきたい。テストのための勉強ではなく、知識をいかに役立てるかを学生自身が考えられる授業を展開したい。

教職実践演習（小学校・幼稚園）におけるアクティブラーニング

教職実践演習（130名）

4年生教職保育実践演習の授業の目的は、小学校・幼稚園教員や保育士の資格取得にかかわって、これまでの学習内容や履修状況を振り返り、教育者・保育者として立ち立つための自らの学習課題を明らかにすることである。また、就職後のキャリアを形成していくために必要な知識や実践力を身に付けることをも目的としている。卒業を目前にして、プロとして働くことに迷いや不安を抱えながらも、自身の問題として真摯に取り組もうとする学生の態度には成長を感じさせるものがある。学生自身が自らに必要とより積極的に授業に取り組むためには、グループ討議や作業を通して行う「アクティブラーニング」が有効である。プロとして働くための知識や技術の最終確認を行うとともに、自らの課題を明確にすることが効果的に行えるものとする。

・アクティブラーニング事例

今年度は、グループワークを取り入れ、発表するという形式の90分2コマの内容を計画してみた。実際には2コマでは終わらず次の授業の30分を使うことになった。来年度は、はじめから3コマの計画にすることが学生の実態から望ましいかと考えた。

<準備するもの>A3用紙、黒マジックペン、カラー12色マジックインキ、4色付箋紙

<内容>

1コマ目

1. 環境を通して行う教育が幼児教育の基本であることから、望ましい環境構成の在り方について、講義を1時間行う。
2. パワーポイントを使って講義と同時に生活習慣形成に向けての環境構成や、発達段階に応じた遊び環境の提案など、多くの写真を使って視覚に訴える授業とした。
3. 1, 2を受けて5, 6人のグループに分かれて相談し自分たちの理想とする幼稚園を作る。という課題を出した。自分たちで園名も考えることで主体的な取り組みになるようにした。「どんな幼稚園を作りたいか」学んだ環境構成の工夫の視点を取り入れ、独自性を出す。初めはA3の紙にプランを立て、次週は模造紙に書いていくという見通しを伝えた。

2コマ目

先週の続きということで、話し合いから模造紙に幼稚園の園庭や保育室を絵に描き付箋紙でその環境の意味付けを書いていくという作業に取り掛かった。

後半30分で、発表時間とし、5担当者ごとに2グループずつの発表という計画であったが、グループごとに話し合いの時間に差が出てきて、発表に至ったのは25グループ中3グループ程度であった。翌週も30分程度発表時間を使うことを予告した。

3コマ目

発表できなかったグループのために限定5グループの発表ということとした。

学生に聞くと「できるなら発表したい」という積極的な学生が多く、希望がかなわなかったグループも出てきた。そこで、来年度は3コマ使えと充実するのではないかと考えた。

#### <発表内容>

学生5, 6人が前に出て、掲示した自分たちの園について述べたが、一人一人役割分担があり、どんぐりの木を植えてそれを秋には使って保育にいかしたいなど、園庭について述べる学生、ビオトープや野菜栽培のできる畑を作りたいなど自然環境にこだわって述べる学生、室内環境への工夫を述べた学生など、どの学生も積極的に自分の園としてプレゼンテーションすることができて、驚いた。さすがに4月から実際の保育者となって仕事をするという学生にとっては大変具体的な提案やプランがあって、どのグループも充実した内容であった。4年間の勉強や実習の成果が出ていることを確認することができた。

(作成中の様子)



学生相互の活動で、技能の向上を図る

プレゼンテーション演習（初級）（2年生対象 30名程度）

1) 授業の目的

様々な場面でプレゼンテーション活動が為されていることを知り、プレゼンテーションの重要性を認知した上で、学生がそれぞれに実践を試みる。また、他の学生のプレゼンを評価することで、自らのプレゼンテーションの向上を目指していく。

2) 授業の概要

プレゼンテーション科目として、個人発表やグループ発表の中での意見交換は必須であり、学生参加型・グループディスカッション・グループワーク・ブレインストーミングは自ずと為されるわけだが、プレゼンテーションツールとして、パワーポイントの技術を獲得する上においても、グループワークや協同学習が有効であることがわかり、授業に取り入れている。

3) パワーポイント技能の習得

プレゼンテーション演習（初級）においては、未だ、パワーポイントの技能が未熟な学生も多い。一方、高校までにパワーポイントを使用したプレゼンテーションの体験がある学生も混在している。学生にパワーポイントの使用方法を提示した場合でも、直ぐに理解できる学生と、戸惑う学生との差は著しい。

そのような場合、教員が個々に指導することは当然だが、学生間の協同学習を促すことによって、予想以上の成果を得ることができた。教える学生は自信が持てるし、教えてもらう学生の方も次々と技術を身につけていくことができるからだ。学生個々の能力が互いに向上していることを教員が認め、評価することより、成果はより大きくなっていく。本授業を通して、プレゼンテーション技能検定1級・2級を取得している学生も少なくない。

基礎演習Ⅱ（1年生対象10名）

1) 授業のねらい

- ・大学で学ぶために必要なスタディスキルの習得を目的とする。
- ・具体的な学習内容は、「ビジネスアイデアコンテスト」に向けて、各チームがビジネスアイデアを練り上げ、それを発表用資料にまとめ、最後はコンテスト形式でプレゼンテーションを行うものである。
- ・これらを通して、企画・構想力、資料の作成能力、プレゼンテーション能力の涵養を目指している。

2) 授業方法の概要

- ・15回の授業の内、はじめの4回がグループディスカッションのためのトレーニング、5回目から12回目が企画・構想とプレゼンテーション用資料の作成、最後の3回がコンテストの予選と本選である。

3) 工夫している点、心がけていること

- ・グループディスカッションのためのトレーニングの一環として、ブレインストーミングを活用している。
  - ・ブレインストーミングでは、①人の発言を一切批判しない、②自由奔放、非現実的（夢物語）発言を大歓迎、③質より量を求める、④他人のアイデアに便乗する、などのルールがある。また、KJ法では、自分のアイデアを1枚ずつ小さなカードに書いて順番に出していく。
- 授業中、学生たちに発問・挙手・応答を求めると、多くの場合ほとんど空振りとなる。彼ら・彼女らは、何も考えを持っていない訳では決してない。考えてはいるが、それを人前で発表することにはかなりの抵抗感があるということのようである。実際、授業中の発問・挙手ではなく、授業の最後にコメント・感想などを紙に書かせて提出させれば、多くの考えや意見が出てくる。このような学生の実態を踏まえると、上記のKJ法は、授業中に学生たちの多くの考えや意見を引き出す工夫として、有効性の高いものと思われる。

統計分析の実践力を身につける

経営統計処理 (3,4 年生対象受講者数 40 名まで許可)

1) 授業内容

経営・経済領域において中級レベルの統計分析力を修得する。統計分析の手法は多岐にわたり半期 15 回でできることは限られているため、学習内容を必須項目に絞り込んである。その中で基礎から応用まで段階的に学習を進める。

経営や経済の信頼できる実データを利用して統計分析の実践的活用法を体得することを到達目標とする。

2) 授業方法

- ・ 15 回とも情報処理教室を使用。
- ・ 講義と PC による演習を併用する。
- ・ 毎回、先に講義で理論や手法、適用上の注意などを解説し、次いで例題に取り組む。その後、課題を与え演習を実施する。
- ・ 教科書は使わない。
- ・ 教材プリントを配付して授業を進める。

3) 演習によるアクティブラーニング

- ・ 演習では、Web 上で入手できる政府統計や企業データなどの実データをできる限り利用する。総務省統計局や企業サイトから課題内容に合致したデータを学生自身で見つけさせることもしている。
- ・ 演習を開始したら机間巡回し、学生を個別に指導する。
- ・ 実数表の持つ意味や使用されているデータ型、クロスセクションデータと時系列データの相違等が分からず分析を行なう学生が少なからずいるため、可能な限り一人一人チェックし、誤っている場合にはなぜそのデータには適用できないかを指導している。
- ・ 大半の学生は演習を通じて初めて様々な統計データに接するようであり、演習の副次的効果もあると見られる。
- ・ 個々の受講者に目が届くきめ細かな運営管理上の視点から、受講者数を 40 名までに限定している。

4) 留意点など

- ・ 授業の性格上、欠席は脱落につながるため、毎回出席することを常に促している。
- ・ 机間巡回の際、分からないことがあってもなかなか質問しない学生もいるため、そのフォローをどのようにするかが課題である。

スタディ・スキルとソーシャル・スキル

ビジネス実務概論C（基本技術）（22名）

1) 現状

この科目では授業時間の一部を用い、最近のニュースに関するスピーチを学生に行わせた。この科目の目的は、学生にビジネス実務の基礎的な技術を身に付けさせることである。そのためスタディ・スキルやソーシャル・スキルを訓練する。新聞記事を読んだりテレビの報道番組を観たりすることは、スタディ・スキルの訓練と言える。スピーチを行うことは、ソーシャル・スキルの訓練と言える。

専門科目の学修のためにも、就職試験の対策としても、時事問題に関心を持たせることは重要である。しかし学生は誰もが時事問題に関心を持っているわけではない。新聞を読む習慣が、身につけていない者もいる。（新聞を定期購読していない家庭も、見受けられる。）テレビの報道番組についても同様である。

話題を政治・経済に絞ると、ニュースに触れようという気持ちが起きないであろう。そこでこの科目では、スポーツや芸能に関するニュースでも可としている。やがて政治・経済にも関心を広げるように、と指導している。

ニュースの内容は事前に（授業時間外に宿題として）、PowerPointのスライド1枚に要約させている。このような縛りを設けないと、その場でスマート・フォンを使って、ニュース・サイトの記事を読み上げるだけ、という事態が想定されるからである。

スピーチの時間は1分間としている。ただしストップ・ウォッチを使って時間を厳密に測定する、などはしていない。柔軟に対応している。

この課題を行った場合は、平常点の一部として、成績評価に加えている。行わなかった場合に、罰則などは設けていない。

2) 課題

各回、数名を指名して事前に準備をさせている。実際にこの課題を行う学生は、全体の半数である。課題を行わない主な原因は、前述したようにニュースになじみがないことと、人前で話すことが苦手なことがあるようである。

人前で話すことが苦手な学生に対しては、苦手だからこそ授業の中で経験しておこう、と呼びかけている。またそのような学生が不安に思わないように、準備の仕方から実施まで段階を踏んで、より丁寧に指導する必要がある、と考えている。

3) 質問

講義を双方向化した場合、演習や実習とはどこが異なるのか。AL型授業が単に、講義の演習・実習化を意味すると仮定する。そうであれば単位の設定を変更したり、ひいてはカリキュラムを変更したりする、必要が生じるであろう。それは現実的ではない。従って講義を双方向化しても、演習や実習とは根本的に異なる点があるはずである。

## アウトプットが大事

経営分析入門 (2・3年生対象 80名程度)

### 1) 授業の狙い

経営分析とは、会計情報およびその他の経営情報を利用して、企業の経営活動の実態を把握する技法である。授業では、損益計算書、貸借対照表、キャッシュフロー計算書などの会計情報による財務諸表分析を中心に学習し、財務安全性、収益性、成長性などを分析する基礎的な手法を理解することを目的とする。

### 2) 授業方法の概要

事例や実際の企業の財務諸表を使用しながら解説したのち、演習の時間をとり、課題について各指標の計算・分析を行わせたのち、なぜそうなっているのか、その数字は何を意味しているのかを各自に考えさせ、企業活動上、何をすればよい方向に向かうのかを検討させる。

### 3) 工夫している点及びその効果

まずは適切なケースを解説して、これから何を分析するのかのイメージをつかんでもらう。その後、課題として配布するケースまたは実際の財務諸表を用いて各経営指標の計算、分析に入り、その結果の意味を考えさせ自由にコメントをつけてもらう。その後、教員側から解説を入れて課題は回収するが、コメントの正誤よりも学生自身の解釈を書き出してもらうことに重点を置く。

大人数に授業であることに加え、財務諸表分析の手法の解説に多くの時間を取られることもあり、学生に能動的な活動をさせる時間を十分にとることは現状難しいが、講義の大きな項目ごとに、少なくとも1回は自らの考えをアウトプットする時間を取ることで、「会計情報を読む」ことの面白さを感じてほしいと考えている。